



明治  
38 4 21  
内交



はじがき

戦後の経営は朝鮮の仕事なりと物知り貌に講釋する  
迄もなしとすれば何も肩の凝る様なものを書いて讀者  
を困らせるにも及ばぬ事此一卷素病中の雜筆前後取  
り止めたることもなきがせめての特色いかにも世に  
公にする勇氣もあらざれど時節柄といふに免じての  
書肆の相談に打負かされ遂に藥代の身代にたてぬ讀  
んで貰へば千萬至極讀んで貰はいでも不足はなしな





ど、人並らしき手前口上裏面の韓国に泣きつかれて  
一寸列べて見ると書くの如し

征露二年三月十一日奉天占領の  
快報至るの日

下關の客寓に於て

著者識

# 裏面の韓国 目次

第一章 極東の秘密國……………一

(上) 天與の好財原  
(下) 先づ韓國の飯を喰ふの要

第二章 亡國の縮圖……………七

斷腸の歌詞——事勿れ主義

第三章 世界一の喫烟國民……………一〇

(上) 喫烟の由來——先天的嗜好  
(中) 煙草と韓人——煙草栽培の有望  
(下) 虛榮的の國民——紙卷煙草の代名詞

第四章 豚犬的生活……………一九



(一) 韓人學の初歩——韓國の趣味  
 (二) 家屋の構造——人間の豚小屋  
 (三) 家屋の構造——神聖なる豚小屋  
 (四) 家屋の構造——不倫の犯罪製造所  
 (五) 世界一の不潔國民——韓國の七大産物  
 (六) 糞尿と便所——ろの掃除人  
 (七) 用便の方法——小便の効能

第五章 單調なるホーム……………四〇  
 個人主義の信念……………四〇

第六章 族制主義……………四三

- (上) 富者の義務——犯罪の連坐  
 (中) 族制の弊——公共的感念の欠乏

(下) 族制の弊——國民相陥す亡國の狀  
 第七章 世界の遊惰國……………五二

- (上) 今日主義以下の人間  
 (中) 雨天休業  
 (下) 遊惰と服裝

第八章 酒幕……………六三  
 第九章 飲食物……………七六  
 第十章 市場……………八四  
 第十一章 店舖……………八七  
 第十二章 韓人の日本觀……………八八  
 第十三章 韓人一夕談……………九五



●湖南兄に與へて内地生活の  
趣味を語るの書……………101

附 録

韓國みやげ一夕話……………105

裏面の韓國 目次終

裏面の韓國

沖田錦城述

第一章

極東の秘密國(上)

天興の好財原



東洋のバルガン半島たる韓國は世界に於ける一の秘密國である、今や中央政府の樞機から下地方の行政に至るまで萬事我國の手で改善を旋しつゝあるのであるが、土地が余り日本に接近し總ての事が知れ易いので燈臺下暗しの諺通り未だ我國民は左岸の注意を拂はない傾きがあるが、總ての點から視察して見ると随分不可思議な點が多い



ソコで其の不可思議なる社會上の裏面を紹介して諸君の參考に供するは全く無益の事であるまいと信ずる、

韓國と言へば何だか憐れッばい、物悲しい淋しさうな、金の無さうな、詰らない、汚ない、厭な國のやうに一般の人が想像して居るが、成程金のない點や、淋しき點は相違ないが、詰らない面白くない、取るに足らない、詰り望みの無い國のやうに想つて居るのは非常な間違ひである、これは別に事新らしく講釋する必要もないが、地味の肥へた點や、農業の幼稚な點や、礦山と云い牧畜と云い種々様々の遺利が到る處、八道の山野に頗々として居るのは少なくとも同國に於ける事業の有望を示して居るの、將來我が大和民族の飛躍すべき唯一の國柄だらうと思ふ、然るに只單に金の無い汚い厭な國であると云ふやうに見るのは全く間違ひで餘り韓國を馬鹿にした咄で前途

大多望なる天與の好財源を無視する亦甚しと謂ふべしだ、兎角我國民は韓國と云ふ事に就ては餘り重きを置かないようであるが、さて戦後の經營は如何なるものかと云へば外でもない、韓國に於ける經營で戦後に於ける韓國の諸事業は我が日本人が不可免的任務だと謂ふべきである。

### 極東の秘密國 (下)

先づ韓國の飯を喰ふべし

ソコで機敏なる人々は既に今日より韓國に於ける有る事業を調査し着々其の方針を立て前途飛躍の計畫をして居るが、サテ其の人々が果して韓國の狀態が如何なるものであるかと云ふ事に就て充分に悉知した人は甚だ勘ない、尤も近來調査とか視察とか種々なる名義を以て段々彼地の狀況を取り調ぶる人もあるが實際韓國の狀況を裏面を



で知悉する者は有るまいと思ふこの韓國の狀態は一朝一夕に知り得られるものではない、すくなも自ら韓國の内地深くに住居をなし韓人的生活をして韓國の飯を長く食った者でなければ決して其真相は解るものではない、韓國の人口は幾千あるかと云へば或は一千萬と云ふ者もある、或は一千二百萬人、或は一千五百萬人、或は二千萬人とも云ふが、韓國政府の統計に依ると二千萬は無いやうである、コレは如何にも奇怪な咄で兎に角一の獨立國が自國人民の統計を持たないのであるから其の國の價値も判斷せらるゝであらう、譬ば一家の主人が其の家族の頭數を知らんと同じことで一國の主人公たる韓國政府が其の家族たる國民の頭數を知らぬやうな鈍馬な政府であるから國家の財政計畫を立てるなどの事が出来得べき筈がない、然るに今日までの多くの識者は韓國政府に向つて財政の改革をせよとの或は教育の普及を計れたの軍備の擴張をせよ

5  
なぞと云て居が是は余程韓國政府を買いかぶつた議論で自國國民の頭數さへ知らぬ政府が如何にして是等大問題に對して計畫を立てるとが出来やう、是等は兎に角として其の人口は何うも據るべき根據がないから確たる統計を得ることは至難であるが種々の點から調べて見ると先づ千二百萬人位の人口が確かだらうと思はれる、而して韓國の地を八萬二千平方哩とすれば一平方哩に平均百何十人位の割合で我が日本に比較すれば其疎密の點に於て非常なる相違で到底咄しにならない、夫に地味は肥へ土地は有り餘り従つて其間に於ける遺利多く多望なる諸種の事業殆んど數へ切れない程である、元來韓國は甚だ幼稚で未だ農業國にも至れない程の有様であるから今日の所、第一着手してやるべき事業は土地の開墾農業の改良等であらう、今や韓國の事業は呼び物となつて總ての人に注目され夫れく具眼者に依て研究された結果は近來新聞紙



上などにも發表されてゐるのは頗る欣ぶべき現象で將來韓半島に於ける殖民事業を遂行する有力の要素たるべきを疑はない、然し現今新聞紙上杯に發表せらるる調査報告なるものを見ると随分實地に就て適合の出來想もない第一算盤上間違ひさうな設計も往々認めらるゝが是等は前にも言つた通り充分彼國の民情風俗を知り抜いた上の事でないから動もすれば淺薄な調査や生嚼りの觀察に流れる譯でもある此際志あるものは腰辨的輕卒の態度を執らず親しく韓地に這入り込み彼の國の飯を喰ひ社會萬般の事情に通曉した上で充分なる責任を持ち社會に公表するが最も必要であらうと思ふ、如るハケ釜しき理窟は先づ此位に切り上げ次回よりは具體的に極東秘密國の内幕を描寫するとしやう。

## 第二章

### 亡國の縮圖

斷腸の歌詞事勿れ主義

「アララン、アララン、アラリヨ、アララン、テイヤラ、  
ベツテヤラ、ムンギヨン、セーヂヤ、バクタルランギ、ホン  
ドツケ、パンマーニ、ダーナカンダ」

この歌は韓國八道到る處都鄙となく老幼となく一般に啼唱する俗歌であつて、能此國の状態を寫し一種亡國の韻を含んで居る、落日地下線下に沈み草刈る童が影を長砂に曳くの時、夜色漸く更けて殘蟲露に咽ぶの時、或は高く或は低く一種物悲しい哀れ



ッばい聲で此歌を誦つて行くときは如何に物の哀れを感せしむることよ。

半島の風物中最も斷腸の感慨を惹くはこのアララン歌曲に越すものはあるまい。

偕この歌の大意「アララン」とは啞聾の義にて則ち啞や聾であれば啞聾なる哉、啞聾なる哉、天下の人は皆この啞聾となり總て國家の事には耳を塞ぎ口を噤じ我から門外漢となり全く世と斷ち放れ世間の嫌疑を避け面白く可笑く其日を遊び暮すのが人世の得策である。アノ聞慶(慶尙道)の鳥嶺と云ふ山に生て居るバクタルと云ふ樹はホンドツケと云ふ砧やハンマーニと稱する着物を巻く物となつて八道に供給されるではないかと云ふ意味を誦ふたのだ、この歌が如何に韓國人の韓國人なる處を發現して居ると云ふは一度び彼地に渡つた者の首肯する處で無氣力な無精神な無主義な彼國民の思想も畧ぼ察せられ、哀れ亡國の狀が盡されて居るが、彼の聞慶の鳥嶺に於けるバクタルが

砧や何かに製造せられ八道に送られる状態を歌へるなど道は風流の國民たる特性を現はし儲かに八道の山川を詩化せしむるやうな氣持ちがして一種の妙味がある元來この歌は余程古い歌で今日までも其の流行が少しも衰へないのは此内に一種の魔力があるからで詰りこの歌を盛んに誦つて居る韓人其の者を支配する或物があると認めると出来る、夫れは何物かと云へばアララン主義、換言すれば隱遁主義、事勿れ主義、小心翼々主義とでも云ふべきもので迂乎國家の事でも言ひ出して飛でもない嫌疑を受け一身一家の敗亡を招くやうな事があつては大變、國家だの社會だの公共だのと乍麼な大外れた事には耳を傾けず目を貸さず、詰りアララン主義を固守して只一身一家の安逸を計るのが策の最も得たるものと信じて居るのである。

恁麼とは無論、彼等が公言するのではないが皆暗黙の裡に這般の消息を吞込み政治上



の嫌疑者たらざるやう互ひに充分に警戒を加へて居るとはこの歌が兒童走卒に至るまで盛んに謠はれ殆ど衰滅の期なきを以ても證明する事が出来る。斯の如き歌の流行する限りは韓國は到底其發達を見るところは出来ない、故に吾輩は斷言する、韓國の改革が出来て再び日月の光を仰ぐ時期があるとするれば、即ち此アララン歌曲の滅絶に歸した時である、アララン歌曲は最も能く韓人の特性を發揮して單純なる其頭腦を出來得る限り殺風景に又身屈に變化せしめたる一大勢力と謂ふべきものである。

### 第三章

#### 世界一の喫烟國民 (上)

喫烟の由來——先天的嗜好

黒い冠を被り白い寛濶な服装をなし、二三尺もある長い煙管の火皿の大きいと云つたら恰で日本の手品師が用ゆる物のやうな、开して杖兼帯とも云ふべき煙管でスツバくど煙草を吸ひつゝノサリく歩き居る韓人の姿は如何にも暢氣極まる体裁で誰が觀ても一見世界第一の暢氣國民たるを知り得らるゝである。一体此煙草は彼等の間にては一名を南草と言つて居る、开して彼等は煙草は日本より傳來した物であると云て居るが南草の意味は南蠻國即ち今の暹羅、安南地方でもあらうか、其の地方から傳はつたので南草と呼ぶのであるが此煙草に就て大分面白い話がある、則ち日本から最初傳はつた當時は皆毒草のやうな考をして誰一人吸ひ試る者も無かつたが、新羅の某と云ふ人が初めて煙管を用ゆるやうになつた、ソコで非常に同輩間に忌み遠ざけられたが如何にしてもソレを止むることが出来なんだ、處が追々



大分同好の士も出来て段々と喫煙者も増加し、遂に全國に弘まり支那地方……即ち今の滿洲地方まで及ばすやうになり、韓人は盛んに其の賣付けをなし一時非常の奇利を博したと云ふとが彼等の口碑に存して居る。

韓人と煙草——這は甚だ面白い題目で掘くとも韓人を研究する人の爲めに欠く可らざる好材料である、韓人と煙草とは何か離るべからざる因縁が有るやうで韓人の煙草に負ふ處も又大なりと謂はなければならん。

今日の韓人に無氣概、無氣力、而も世界第一の暢氣的國民となつたのはニコチン毒の力預つて効ありだが案山子には弓矢を持たせて初めて案山子たるの資格を供ふる如く此韓人には長煙管を持たせて初めて立派な韓人たる資格が備はるのである。

## 世界一の喫煙國民 (中)

煙草と韓人——煙草栽培の有望

煙草を吸ふのが暢氣であるか、暢氣が煙草を吸ふのであるか兎角韓人の暢氣なるは、世界に於ける暢氣の好模型と言ふべきである、此點より觀れば彼等が始終携へて口を離さぬ煙管は韓國をして、今日の危態に瀕せしめたる一の恐るべき毒源であらう、見よ彼等が狭苦しい、薄暗い、日光も充分映さない空氣も碌に流通しない室内に安座しつゝ、煙管で頬杖を突き頻りに煙草を吹して暢氣に其日の暮るをも知らぬかの如く喃々語りつゝあるを。

日本人ならば先づ其の朦々たる煙の裡に這入れば直に頭を痛めて了ふ、到底も一時間とは居られずに逃げ出すべきであるが、ニコチン毒の爲め全く神經を麻痺せられたる



彼等は一向平氣なもので誠に愉快さうに見ゆる、彼等は朝から晩まで——起床してより寝に就くまで食事中、仕事中、或は道行く途中にも甚しきは便所の裡にても例の長煙管を口より離すとはない。

彼等の一日より喫煙の時間を引去つたなら幾干の時間もないであらう、一体此喫煙は單に衛生上に有害であるのみでないのみならず經濟上から觀るも非常な損失である。彼等の煙管は甚だ持ち扱ひの不便な代りに或時は杖の代用となり或時は護身用の武器をも勤るのである、ツイ此頃のとであるが京城の官吏中には雁首の下にクル／＼廻はるやうな、輪轉仕掛のものを發明しこれで頰杖を突きながら自由に持ち扱ひの出来るやうな鹽梅にして居るのがあるさうだがこれは随分重寶な考付きである其の他高位高官の人々は煙管の爲めに勘からぬ金を掛けて居る。

ソレから彼等の喫する煙草は大概地煙草を用ひ都會に於ては多く刻みたるを吸つて居るが、田舎では一般に乾葉の儘で吸つて居る、韓國の煙草で最も良いのは平安道の平壤で、それから開城、元山などで忠清、全羅地方は産額の多大なので有名である。價額は我が日本などに比すると非常に廉價である、併し彼等は其の栽培法と肥料等の点に欠点が多いので折角の風味を害するのは如何にも惜しむべきとで、將來我が農民が彼地に渡航して農業に従事するに當つては此煙草の栽培などは最も有望なものであらう。

近來は彼地にもハイカラ風か徐々吹き初め當世向きの青年などで巻煙草を吸はぬ者はない、甚麼田舎の奥の隅々までも必ず相當な巻煙草を販賣する店があつてこの頃では我官製の巻煙草などを販賣して居るが京城邊の大官連になるとズツと贅澤で馬尼拉の



葉巻位は大概吸つて居ると云ふ勢である。

### 世界一の喫烟國民 (下)

虚榮的の國民——紙巻煙艸の代名詞

現に地方の官吏など假令平生は吸はないでもヒーローの二三箱や葉巻の一箱位は、何時でも蓄へ置き外國の珍客など見へた折りには必ず供するのが常で自分は平常京城煙草の虎の毛見たいな刻みを一時にダント取寄せ用ひて居るが、彼等の多くは實際自費を以て求めるのではなく大概諸方よりの曰く付き進物であるのは無論である、羅宇竹は農商工等の平民社會は比較的一般に短きを用ひ、上流社會になればなる程長きを用ひて居る、これは繁閑勞逸の差より來したる自然の結果である、然るに近來奇を好み新を街ふ輩は日本流の懷中煙草入を求め従來の皿大的數尺長の煙管を棄て、豆粒

大孔の小煙管に日本の刻みを用る粹な風かハイカラ青年の間にソロ／＼流行を初めたので日本の雜貨店等にては韓人向きとして大抵賣つて居らぬはなく常に可也の賣行を呈して居る模様である兎角韓人は頑固に舊慣を墨守すると同時に、一方甚だ輕躁を極め何所迄も新奇を追ふを好む大々の虚榮的國民であると云ふとを忘れてはならぬ。然るに茲に面白きは我官製煙草が出來迄の、我村井製の紙巻煙草ヒーロー、ホーニー等の彼國に於ける賣行の勢力で中にもヒーローの如き内地各地方にては香甚社會の親玉隊長として永く全盛を擅にし、其新に賣付を圖り顧客を得と欲る者揃く共此ヒーローの模造品で無てはならぬ、故にヒーローてう語は今日にては一般に紙巻煙草と云義に使用され日本人の顔さへ見ばヒーローハナ、チューシーヨ(煙草卷一ツ下さい)杯強請るのが通例である、殊に驚くべきは小兒に至る迄喫煙を好まざるなく、僅か七



八歳の幼童と雖も尙ほ且つ私に吸つて居る程で、其處等に巻煙草の吸ひ殻でも棄てやうもンならうれこそ蟻の甘きに集るが如く、蠅の臭きに群ふが如く、押し合ひ揉み合ひ争ひタカツて拾ひ上げ、逸早く壁の裏や牆の蔭などに隠れるのは内地旅行者の皆能く知る所で日本などにすれば悉く喫煙令違反の資格あるものゝみだ、若し彼等に二三文の青銅錢を與へば彼等の多くは必ずや飴や駄菓子類を買はずして、ヒーローの二三本を購ふであらう、彼等の煙草に於ける嗜好は殆んど先天的である、斯の如く次代國民の繼承たる多數の少年、而も十歳前後の小童よりして既に此爲体なりとすれば未來の韓國も凡想ひやられるのであ

\* \* \* \* \*

桃の花や菜種の花の咲く頃、農夫が牛や馬を追ひつゝ、或は田畦に休憩しつゝ、悠々長管を含んで居る様は實に得も云はれぬ景色であつて、宛然一幅の好畫圖としても好い位である、嗚呼亡國の畫は斯くも美しきものなるか、謹んで世界一の喫煙國民として紹介する所以である。

\* \* \* \* \*

### 第四章

#### 豚犬的生活 (一)

韓人學の初歩——韓國の趣味

人若し釜山或は仁川の港に上陸せば、日本居留地の外へ、邊りに豚小屋に均しき草葺



き土塗りの倭屋三々五々として連り、煙草煙管、駄菓子、脚鞋、明太魚の類を地邊や  
 軒先の嫌ひなく無造作に並へ、牛豚魚肉を屠りて煮立て、其所には穢らしき白衣の韓  
 人群集して、喃喃怪しき語音を弄し、聲高に罵り噪々を見ん、而して一種言ふべから  
 ざる異様不快の臭氣がブンとして鼻を衝き初度の人ならば、大概な人迄が喫驚して殆  
 んど通過に堪へざるの想ひをなし、未だ其全部を見物するの違なくして早や其勇氣を  
 失ひ、匆々にして逃げ歸るもの、恐らく十中の八九であらう、然し箇様な人は到底與  
 に韓國を語るに足らないので、事業を遣つても直ぐ失敗、續て失望…落膽…、最初韓  
 人町より呆々遣げ販りたる夫れの如く、蒼皇遣げ出すは必定である、韓國の韓國たる  
 處は未開化な野蠻な不潔な臭いをして貧乏な處に籠れりと云ふべきで、此臭い穢い野  
 蠻な貧乏な特徴丈を取り除いて仕舞つたら、差引何物も残らぬ譯で、詰り其美味……

買ひ處も其處に潜んで居るのであるから、具眼者は宜しく其處を買つて貰はねばならぬ  
 餘談は休題として此等の韓人街は、如何なるものより組織されて居るかといふに、各  
 地方より出稼ぎに出で來りたる流亡的小商人輩のみにて、居留地に於ける労働者、詰  
 り人軍(人夫)擔軍(擔夫)物賣り、負祿商(行商)馬夫、驛軍(輿丁)等、極下等社會の下郎  
 共を相手に商賣せる御便利の一部街に過ぎない、故に之れを以て、韓人生活全部の狀  
 態を盡せる如く思ふは、聊か大早計且つ酷に失するので——コレはツイ極端なる一例  
 言は、韓人生活一部の小縮影を示せるに過ぎないが、然し彼等が如何に劣等にして蒙  
 昧野蠻の境域を脱せざる而かも、生活程度の低き民族であるかといふだけは充分知る  
 との出来る譯で、これが抑の韓人學——云は、韓人の生活狀態を研究する第一歩であ  
 るが、久之すると砲魚の市久ふして其臭を知らずの類か、糞の臭サ穢サ情無サも漸次



散逸して、左程目鼻に感じない様になり、夫れから段々と年月が経つに随ひ、全く夢の様に失くなつて、一向平氣の平左衛門となり、曩に臭し穢しとして排斥した韓人と伍し、悠々長管も吹かせば、黒く濁た濁酒も飲み、赤い唐芥子の入つた食物も難なくやつて退ける様になり、果ては一所に虱を捫る様な鹽梅式と進化し、茲に愈々韓國の面白さが解つて來るのである。

## 豚犬的生活 (二)

家屋の構造——人間の豚小屋

却説これより徐々本題に入るとして、彼等生活の真相を究め、正体を突き止めんとしたらば、先づ彼等を包容して居るホーム其物が如何なる工合に構造されて居るかより研究を始めねばならぬが、單に其ホームが狭い穢い薄暗い丈けでは所謂韓人學の初步に

あるものゝ口吻で何にもならぬ、否こんな事は、早や誰れしも先刻承知の事で別に珍らしい事でも何でもないからこれからは稍々組織的に其構造を檢査するにしよう—豚を知らんと欲せば先づ其豚小屋を見ざるべからざるが故に。

全体此國の家屋は、多く藁葺(稻藁)草葺(萱、雜草)等の平屋造りで、瓦屋といつては僅に京城平壤其他二三の都會のみで、夫れさへ大分藁葺や草葺が混同して居る位で地方にては、官衙の廳舎及び闕といつて皇祖の靈を祀れる所、並に聖廟、神堂、寺院等を除く外、一般人民の住居は悉く左様である、外壁は例の小さき石を以て不規則に積み上げ、泥土もて矢鱈に塗り立て、柱は恰で線香の様な押さば譯なく倒れろくな極脆弱の木材をもちんだればもがんだ形で用ゐる床下には温突といつて一方の口より火を焚けば、其火氣が床下の穴を通じて他の一方より排泄する仕掛けとなり、隨て其火氣で



充分室内を温めるとになつて居る、夏の暑き日などは随分厄介千萬のものであるが、左りとて冬の夜の霜白く冴へたる時や、雪面白く降る晨など、ホカ／＼として下より暖たまる工合と云つたら夫れは又た格別なもので誠に何とも好い心持である、孰れ此温突の事に就ては後章に於て尙ほ述るとして、兎に角建物のお粗末なるは韓國の名物にて、普通常民（農工商）の家なら、大抵間口一間半から二三間位、奥行二間位にて、間口の三四間もあり奥行の二三間もあるのは、飛切上等の部類である、夫に屋根の低さと言つたら、直ぐ頭に間へる程で、人の丈よりズツと低いのも珍らしくない、室数は通例方一間から二間位のもの二三室位にして、一室切りなるも鮮くない、開して室には三尺位の腰を二ツに折らねば這入れぬ様な出入口をつけ、其外小さ窓口を申譯の如く一ツ二ツ穿ち、覺束なくも弱い光線と少量の空氣とを通せしめて居る……

其内部のホド暗サ、陰氣サ……シテ其外圍には矢張り石と土にて築き上げた無細工なる牆壁を廻らせるが其柱痛く傾きて壁の頽れかゝれるなど其見ツ共ナサ加減何とも形容の出来ない程で、或人が世界の家屋中南洋亞弗利加の土蠻やエキスマー人の家位を除いては韓國人の家が確に世界第一等であると評したのも餘り無理からぬ次第で先づは人間の豚小屋とでも云ふ方最も適評であらう。

### 豚 犬 的 生 活 (三)

家屋の構造(二)神聖なる豚小屋

が然し夫れも一概に斥し付け譯にはもかぬ、成る程常民の住屋は右の如き極單一な誠に造作なきものであるが中流以上士人の家になると同じ豚小屋でも比較的稍々大なる豚小屋でなくてはならぬので、前者に比し幾分か体裁は整ふて居る方で、家にはチ



ト不似合なる程の門構へをなし、其家屋の如き大抵兩部は分たれ正面の大門を這入ると直ぐ其處には舍廊(サラン)と云つて外客に接する一棟の建物がある、夫れから又た二の門が横さまに設けてあり其内に妻女や眷族が容れてある一棟がある、これ乃ち内房と云つて其家の親族及び婦人小兒其他僕婢を除く外如何なる親近入懇と雖も一切行通するとの出来ない所で、或る場合に於ては公用を帶べる官吏の入來をも峻拒するとの出来る云は、神聖なる所とでも云ふべく、二の門は即ち其金城の鐵壁にも値すべきであらう、若しも許可なくして妄に此鐵壁の關門を潜る如きものあらば其者は假令撲ち殺されても訴ふる所なき位である、故に國事犯若くは重罪者にあらざる以上一寸した犯人の此處に逃げ込み蟄伏して出さへせねば容易に捕る心配はないのである、然るに事情を知らぬ日本人扱は時々間違はして此内房に突き入り爲めに婦女子を仰天せし

め大騒動を惹起す等の事が往々ある、平時内地を旅行する者の注意すべき事項であらう、扱て其家に用向きあるものは先づ表門を通りて舍廊に至り童子や僕婢を以て其旨を通するか或は高聲を發して其名を呼べば主人出で來りて此處にて用談をするのである、夫れから又た酒食の饗應などある場名には内房より膳部丈けを拵へて運び來り童子が傍らに侍して杯盤の間に周旋するといふ仕掛けになつて居て前の九尺二間の常民の家とは規模と云ひ結構と云ひ幾分趣きを異にして居る點があるのである、然し夫れかと云つて士人の家なら何處でも彼處でも必らず舍廊の設けがあるのであるかと云ふに決してらう云ふ譯には來らぬので金のなき爲め設備の出来ないのも澤山で中には金はあつても政畧上態と拵へないのもある、斯の如く内房のみあつて舍廊なき家は甚麼にすれば宜いかと言ふにこれは矢張り門外に佇立し乍ら用談を辨するより外に致し方はな



いので雨が降れば雨は降り乍ら……決して常民の家の如く無器に這入れぬは言ふ迄もなくこれでは主人側よりも義理にもお遊びにお出なさいなどの口上は吐けぬ譯である  
 ナント不自由不便利而かも窮屈の極ではないか、韓人をして今日の韓人たらしめたる最大原因の一は儘に此屋制の不完全が然らしめたるものと云はねばならぬ。

豚犬的生活 (四)

家屋の構造(三)驚くべき伏魔殿——不倫の犯罪製造所

小サな藁葺小屋——ソコへ巖丈な不細工な石垣を繞らし外面から鳥渡内部を窺ひ知る  
 この出来ぬ殆ど行通さへ自由に出来ない彼等家屋の内房裡の生活状態が奈何に陰氣の極であるか、又如何に世の進化に遅れて社會の活動に無頓着であるかは大略想像が出来る處であらう。

先づ彼等が忘れずに必ず拵へて居る外圍の墻壁は彼等が自ら社會以外に立ち、我は我たり汝は汝たり社會の事我れ關せず焉と個人的主義の感念——所謂アララン主義を代表し世間に一切顔出しもせねば社會の事には關聯しまいと我れから城廓を設けたかの如くである、韓人の猜疑深き陰險に富める特徴は尙ほ種々な原因あるとであらうが要するに我れと城廓を堅ふして門戸を嚴重にし隣人と雖も行通の出来ぬやうな事になり  
 随つて相互ひの事情が充分に疏通せず其の間に何か物の挟まつて居るやうな事になつて居るのが其の發達進歩を害した有力なる點であらう、試みに垣一重門一枚の内幕——即ち赤裸々たる内房裡の状態を寫したなら實に奇々怪々百鬼夜行とでも言ふべき有様であつて其の暗黒裡中には詐欺、竊盜、博奕、博奕、賄賂、姦淫、邪曲、陰謀等人知れぬ驚くべき發多罪惡の分子が籠つて居るのである。彼等は外部との行通を塞ぎ所謂一家の



世界であるを僥倖として小人閑居的に出来得るだけの不善否罪惡を、ヤッて居るので此點から言へば彼の内房裡は不徳破倫の犯罪製造所とも云ふべき一の恐るべき伏魔窟である。

而して此恐るべき——驚くべき伏魔窟裡には數百年前から支那渡りの腐敗せる空氣を以て充滿され嘗て一度も改め清めらるゝ機會なく又た近き將來に於ても廓清を見るやうな事は先づ——思ひも據らぬとである

嗚呼韓國社會の改良を計り彼等の精神に根本的改鑄を加へん日は先づ彼等の惡徳不義を隠蔽せる唯一の門關と城壁とを壊ち其の割據的根性を打破し新らしき光線と清き空氣を流通せしめてこの惡徳不義の製造所たる伏魔窟裡の大清潔法——大洗濯を施すの時でなくてはならぬ。

果して然らば彼等の屋制を改良し其の暗黒なる生活に一條の光明を與ふるは彼等公徳の腐敗、倫理の墮落を救ふべき刻下の一大急務たるや疑ひなき所である。

### 豚犬的生活 (五)

世界一の不潔國民——韓國の七大産物

韓國内地を旅行すれば、路傍や街路中に累々たる黄金の花が、場所も嫌はず狼藉と咲き亂れて居るで、脚の踏み場もなく、潔癖者は一見其不潔と臭氣に驚くのだ、彼等韓人の尻癩の悪いのは實に世界の名物とも言ふべきで、現に斯の國の中央都會の地たる京城の如き、一名を糞の帝都と綽號されて居る程で、到る處人糞或は牛馬糞を見ざる無で、紛々たる臭氣は鼻を襲ひ眼を擧めぬ者としてはな

ソコで京城市内を流れて居る川の如き、各戸より排泄する糞尿を混じ、其の水は一種



の黄色を帯び、ドロ／＼となつて居るなす實に眼もあてられぬ光景であるが、彼等は頗と平氣なもので、其の糞川の水で洗濯など遣つて居る、なんと鼻持ちのならぬ咄ではないか。

毎年夏期になると傳染病が流行し、其の傳染病に罹る者の多くは韓人で、非常なる大流行を極め何千人を斃すは珍らしくない、是等は畢竟便所の整理が皆無で、降雨の日なすは糞尿がドロ／＼となつて流れ、人馬の脚や、車の爲めに四方に蹴散らさるゝ、實に言語に絶する光景から起るのである。併し冬の日なすは寒氣の爲めに凍り付けられ、余り臭氣も發せず、格別の事も無いが夏日になつたら堪らない、蛆や蠅が幾千萬となく群り食物や何かに附着するので、其の不潔さ煩さ實に咄も出来ない、憊る次第で彼等は所撰はずヤリ放すのみか、便所に在る糞尿もドロ／＼河中に流込むので、其

の安母尼亞質が自然と地中を傳はり、雨や雪の作用で飲料水に及ぼすから、傳染病の流行するのも無理はない、現に京城地方に於ける井戸の如きは、此安母尼亞質の混じない純良なる飲料水と云つては殆ど皆無で、殊に驚くべきは恐れ多くも皇城の門前をも憚らずドロ／＼やり放すのである、彼等は決して場所などを考ふる腦力を有せないので、街路でも、門前でも、塀外の凹地などでも、白晝公然と平氣にやつて居るが其のやりつ放した糞尿は誰とて片付る者も掃除する者は無く、警察官なども都て無頓着である、ソコで或人が京城市街に於ける人糞牛馬糞等を掻き集むるに於ては見事一の高山が出来やうで、廢物利用と出掛けて、一大肥料問屋を開業したら必ず一儲け出来るに違ひないと云つて居た、糞の帝都に於ける糞問屋、なんと面白い考案ではないか兎に角糞は煙管、虱、妓生、虎、豚、蠅等と共に韓國の七大産物とでも云ふべきで



◎  
◎  
ある

## 豚犬的生活 (六)

糞尿と便所——その掃除人

此七大産物の随一とも云ふべき糞尿の事に就ては實に鼻持のならぬ咄しなるも今少し聞いて貰はねばならぬ、韓國の首府たる京城の有様が斯の如しとすれば其の他各地方の實況も畧ぼ想像せられ至る所世界唯一の糞の國たる事を證明して居る、此等は衛生上は云ふに及ばず國家經濟の上から觀るも非常な損失で、便所の整理の付かないのと尻癖の悪い爲めに可惜好個の財源を所嫌はず撒き散らすは實に惜むべし次第である、ところで以上の如きは、千萬の韓人皆悉くとは云へないが中流以下即ち全國民の半數以上が日々街路や山にヤリツ放す糞尿の代價を統計せば實に驚くべき多額であらう

予は其數量や價額を統計して見る閑日月と勇氣を持たなかつたは甚だ遺憾であるが兎に角夥しい價額なるは疑ひない、殊に風教上決して感心ならぬ咄しで氣の毒ながら豚犬的國民たることを表白して居る。

右の如く述べ來れば讀者の内には或は韓國には便所は無いかと云ふ疑ひも起らうが決して無いではない大抵中流以上の家は兎に角形式だけでも便所の設けなきはなく京城の如き極々下等の家を除く外何れも設備してある、其の他地方の農家などでは殆ど皆設けられて居る、茲に其の構造を述べれば例の塗立小屋の家より少し離れた空地に土を少し堀回め其兩側に二個の石を置き其石の上に跨で建てるやうに出來て居るが入口が馬鹿に大きく殆んど障蔽物も無から、外面から醜体が見透るので堪らない、だから外國人などは何うしても這入る勇氣が出ない、さうかと云つて旅行でもする折には他に詮方



がないから無理から辛抱して夜陰を待ち初めてコッソリ使用するのである。  
 が此便所に就ては折々珍事が起る、此の便所は一の養豚場なので豚先生ノソ〜お客  
 を待つて居るから便所に這入るか否や素破御馳走御参なれと云はぬ許りに早速尻の邊  
 に集つて來るので、予などは最初は如何に奮發しても此便所の厄介になるとは出來な  
 かつたが、特に夜陰などは此豚の襲撃に遇ひ吃驚一番便所を飛び出したとも度々だ、  
 其の他各家に飼養してある犬が非常に此御馳走を好むので、豚と犬が絶えず便所附近  
 に見張りを做て居りお客があればツロノ〜群り來り何程追拂つても決して立去ないで  
 ムシヤ〜遣りつける煩さ氣味悪さは實に咄も出來ない、此國の犬と豚とは全く糞を  
 以て養はれて居る、換言すれば豚と犬とが便所の掃除役を勤め不潔の此國には非常な  
 る貢献をなし、不潔を以て不潔を制する仕組となつて居るのも面白うではなからうか。

## 犬豚的生活 (七)

用便の方法——小便の効能

所謂雪隠の番人兼掃除役たる此豚と犬に就ては尙ほ語るべき事も多いが、其等は都て  
 抜きとし只豚と犬の味が非常に旨く彼等韓國人は皆豚と犬は雪隠育ちに限ると言つ  
 て居る位で話を止め本問題たる雪隠の事に移らう。

田舎地方にては糞尿を以て農業上唯一の肥料として居るので夫れ〜肥料としての使  
 用法を講じ灰や粉糠の類を備へあるから、用便の都度其灰や糠を被せ、开して段々と  
 先の方に掻き遣り夫に糞なすを混じ天然の肥料を拵へ田畑に持ち運ぶことにして居る  
 で田舎の都會などでは本邦の如く年々餅米若干の報酬を以て附近の百姓共に契約され  
 て居るところもある、少しく餘談に涉るやうだが韓人は用便をした時決して手を洗は



ないので却て日本人なぞが手を洗ふのを不思議に思つて居るやうである、手洗ふのは畢竟不潔物が手に附着して居るからであらうと屁理屈を言つて居る、併し道の彼等も冠だけは必ず脱で往くのである、若し周章で冠を着けた儘で用便をするやうなものがあれば酒を買ふて謝罪させるなと云ふ洒落もある、内地を旅行する時折々冠や手荷物を路傍に置き捨てゝあるのを見るがこれは彼等が用便をして居るのを示すので其附近を見廻せば必ず其主人を發見する、而も悠然と例の長管を咬む煙草を吹かせつゝある主人公を………。

それから小便の事であるが彼等の室内には眞鍮若くは陶器を以て造つた平圓形の便器を備へイザと云ふ時は便器を小股に挟んで置いて座しながらシヤア／＼やるのだ、無論女でも——殊に驚くべきは如何なる高位高官と雖も亦如何なる賓客の前でも決して

遠慮なく眼前でシヤア／＼やる、彼等は座を起つて便所に通ふとをしない國民で飽迄安座的——座敷籠りののである、今日韓國向き陶器類の内では此便器の賣れ行きが非常に我が陶器店などでは何れも澤山並べて居る殊に最も驚くべきは彼等は此小便を一つの薬品同様に心得て居るとで、衣類の汚點や種々の器物の汚れを去るに特効ありとて足袋なぞを洗濯する前には必ず一度小便につける習慣である、尙ほ小便で洗へば顔面その荒れを癒すとて婦人連は頻りに化粧用に使つて居る亦十歳以下の小兒の小便は童便と云つて或る病氣に特効あるものと信じられ之を服用する習慣もある我々の眼から観れば實に奇怪と云ふの外はないが彼國では決して奇怪ではない否寧ろ通例の事で恐れ多いことではあるが彼國の皇室に於かせられても之を御飲用遊ばさるゝやに洩れ承はつて居る況や其の下々の豚犬同様の臣民に於てをやた此の他の事は余も語るの勇氣



がない、以上で豚犬に均しき世界一の不潔國たる事實が證明されたのであらうと信ずる。

## 第五章

### 單調なるホーム

個人主義の信念

唐の子西の句に

山靜如大古。日長似少年。

上は王侯大夫より下は閭巷の藝氏に至るまで、彼國人生活の單調なる状態は、殆ど此一句に盡されてあるかの感がある、恰も韓人の爲めに特に用意して此句を作つたかの

如くである、亦彼等の門戸には天下泰平國家安康、或は開門萬福來、掃地黃金出、又は借問酒家何所在、牧童遙指杏花村、其他支那流の古臭い句を貼付けてあるなぞ、一見甚だ幽趣に富んで居るやうで、如何にも奥床しい感じがする、併し其の生活の真相に立入つて見れば、些の奥床しい點をも認めぬのみならず、如何にも殺風景なとで、其の内部を蔽ふ處の幕を切開けば更に取得はない、只單に生活の單調なる無意味に雅緻を存して居る所のみである、彼等の頭には夢にも詩的趣味とか美的生活とか云ふ、洒落た趣きは無いのであるが、之は全く貧乏、幼稚、野蠻の然らしむる處であつて、其の美しき詩句は單に墻壁門戸と共に其の内部の襤褸を包み匿す唯一の武器とでも解釋すべきであらう。

彼等は支那人の如く純粹なる個人主義の信者で、公共、國家、社會等の感念は更に持



たぬので、只機械的に國家の租税を負擔し、道路橋梁等の工役に服する位であつて、其の他に社會國家とは何等の關係を有せぬ、隨つて社會國家の一員としての彼等の價値は、全然零であると言はねばならぬ、之等の人間に對し忠君とか愛國とかを説くのは聊か方角違ひの咄しで畢竟徒勞に屬する外はないのだし、  
 ろこで彼等の頭は皇帝より官爵位階を受ければ兎に角、直接政府と關係無き者は、全く國恩なき者として、社會に對する義務無き者の如く考へて居る、嘗て日清戰役當時皇城の變に際し、彼等が悠々長管を咬んで見物して居たる如き以て例證となすに足りるであらう。

が併し彼等が茲に至つたに就ては、只理由無くて茲に至つたのではなく、必ずそれだけの遠因が無くてはならぬので、かくも極端なる個人主義を奉ずるの原因に就ては尤

も讀者の研究に價すべき處であらう。

## 第 六 章

### 族 制 主 義 (上)

富者の義務——犯罪債務の連座

彼等は眞にも述べし如く、純然たる個人至上主義の信者で社會人類の生活としては、最も程度の低い家族思想の稍々發達した族類主義を奉じ恰も太古木巢時代の感念に少し毛の生へたる如き割據的生活に嗷嗷して居る。

ソコで其同族間(内戚を除く)の親密なるとは豫想外にて、彼等の語に同族即ち親族を稱するに一家(イルガー)と云ふにても分る彼等は即ち同族間を以て一家と心得て居る



ので、或る程度に於て生命、財産、權利、義務、利害、得失等が共有的になつて居るかの如くである、故に其一族中に一人の高位高官を得るものありとすれば、其人は其左右部下に於て、あらん限りの力を以て其一族中よりトシク採用し、斯くて一門の榮達を謀る、ヨシンば其拔擢を受けなくても其余光を以て權威を振り廻すことが出来るので、直接間接其一族が受る利益、幸福は大したものであるが、若し之れに反し一人の犯罪者を出す様な場合には、此國の風俗として其一族は皆夫れく罪に問はれ刑に處せられ、甚しきは一門の破滅を招くとも珍しからぬと云鹽梅で、其半生に於ても有無相通じ緩急相應すると云ふ仕掛けであるから、假令貧乏でも同族間に一人の富裕者があれば、それは安心なもので、夫れく其扶持を受け、子供等の如き、食糧の足らない時は、臨機食客に行く位は何ともない事で、長さは二年三年一戸總括り居候

をすることもある、詰り其富裕者は其同族の貧窶者を救ふべき義務あるもの、又な貧窶者は一族中の富裕者に倚るべき權利あるものと定められて居るのであるから、居候し九からとて、一向耻も頓着もないのである、負債の如き假令其署名がないにせよ、同族間は明に其償却の義務あるものとして認められて居る、故に其當人に於て償却の出来ない場合は、其同族中誰れ彼れの差別なく勝手に催促に出掛ける事が出来るので決して自分の署名がないからとて拒むとは出来ない、否事實拒む様な事はないのである。

ソコで金など貸付ける時には本人は兎に角其同族間に、儼乎したものがあれば大丈夫差支なしと見て可なりである、韓國に行て金の取引などする人は能く記憶て居るがよからう。



以上の如く彼等同族間の親密なるとは實に驚く程で、或る意味より云へば同族間は大なるホームで即ち彼等の所謂一家と稱するも敢て無理からぬ次第である、然らば其同族間には些の風波、紛争なきかと云ふに、それは何程族制主義の此國でも眞拔るういふ譯にもゆかね、否彼等の所謂親密なるものは、たゞ單に利害の關係より打算した親密に過ぎないのであるから一度其關係が齟齬ふ事になつたら堪らないやれ不人情だとか不親切だとか、其處に例の異論な紛争、悶着が持上るのである。

### 族制主義 (中)

族制の弊——公共的感念の欠乏

一家即ち一族、一族これ一家てふ感念は、彼等の腦裏を支配せる一大神符とも云ふべく、彼等は其絶對の行者として力めたる結果、彼の族類的生活は著しき發達進歩を

遂げたのである。

族制主義といへば、何處やら懐かしい床しい様で、親族間の不和合な人達は、一寸健康に堪へない想ひもあらうが、彼等の族制は、今や非常なる腐敗墮落の極に陥り、道徳上、風紀上其他色々の方面に其害毒を流布し、殆んど其弊に堪へないかの如くである、現に其國民の思想を飽迄消極的に——頑迷不逞ならしめ、社會公共的事業の進路を遮り、國家的感念の發達を塞ぎ、人心の出來得る限り狡猾、譎詐、邪曲、陰險、猜忌、反目、陥穽等に導く如き、最も其害毒の顯著なるものであらう、宜也、此國には始終黨争紛争として絶るとなく、乙は甲に代り、丙は乙を介し、丁また之を窺ふと云ふ如く、小黨分立——朝令暮改——蝸牛角上に争ひて、一日も寧日なきことを、而して其黨争たる、立派なる議論主義を標榜したる堂々たる天下の公議にあらず、單に自家



の政權爭奪、勢力消長の機械爪牙たるを旨とせる、區々情實的族類朋黨の私争にして其間些も公明正大の趣なく、全く暗中の鬼闘と異なるなした彼等は何事にも族類を以て集り、朋黨を以て族類を造る、族類は彼等の米の飯にして、これが爲めには天下國家を亡すも可也、君主を弑するも可也、況んや人を殺し友を賣り財産を奪ふ如きをやた、其他の事は云ふも愚かである、斯くの如く眼中自己の利害族類の消長より外何物もなき彼等に夢にも公共的趣味感念等のあらう筈なく、彼等は殺風景なる此國の山川を一層殺風景ならしめ、寂寞なる此國の都鄙を一倍寂寞ならしめて居る、現に此國には族類以外の意味に置かれたる二人以上の會社の組合事業と云ふては皆無の姿で、其娛樂の如き、單に同族間相會しての娛樂に限られ居る様で、少し人の集るものと言つたら、萬人契或は千人契と言つて我富織見たいなもの、其他は射場に弓を引くとか

又は詩會を催すとか、或は骨牌を弄する位のもので、俱樂部、演藝場公園等の如き平民的意味を含める公共的娛樂の設備としては絶無である、現にアノ廣い京城の市街に於ても、何一つ此れ等機關がある譯ではなく見世物小屋の一つだに見受けなれないに至ては實以て情けなさの限りである、其癖彼等は餘程物見たがりの方で、少しでも物珍らしい風變りのしたものなら、其處には直ぐ群集して瞬く間に數百人の眞白い人の山を築く、彼等は何處迄も觀光的國民である、斯かる國民の腦髓がいかに乾燥にして殺風景であるか、骨相學者にでも見て貰ひたいのである彼等は詩會、射弓、萬人契、骨牌等を以て、僅に其公共的娛樂の一端を示せるのみで確に其半面以上を杜塞されて居る、此杜塞されて居る、ヨリ多くの暗黒面こそ實に恐るべき惡魔の潜伏場である、道德の腐敗——風紀の紊亂——事業の衰微——元氣の銷沈！。



## 族制主義 (下)

國民相陷す亡國の狀

彼等は同族間相喜び相慶し相憂ひ相悲しむを知るのみで、同族以外の人には些の感覺も有たない、路傍に行き仆れの人であらうと、郷人にヒドイ病人があらうと……所詮彼等の血と涙とは、單に狹隘なる同族間に濺がれるのみで、苟にも同族以外に及す必要と場合がないのである、此點に於て彼等は飽迄家の人にして、社會國家の人たるに適せる資格を具へないのである、隨て此國には、孤兒院、養育院、貧民學校、病院等の社會的慈善事業は、一として行はれて居らぬ。彼等の頭腦は誠に内へのみ温く熱して居る其内へのみ熱して居る丈け夫れ丈け、外に對し冷酷にして、而かも殘忍を極めるのだ、語を換て云へば、彼等は同族以外には何

等目的なきが故に、其同族の腹を肥やし、生命を繋がん爲めには、如何に極端なる方法手段と雖も敢て辭する所でないで、其他族に對するや、恰も越人の秦人に於けるが如く、虎視眈々互に鎬を削り壘を深ふして若し敵に寸毫の間隙あらば、之に乗じて其利器を乗り取るといふ工合にて相互十分の警戒を加へ、一寸の油斷もあらせぬのである、斯の如く彼等は族類の喧嘩を以て飯の菜として居る、詰り彼等の一代は、此飯の菜たる族類の喧嘩を生命として居るので、これを取り除けば他に何の剩す所はない隨て社會上の波瀾活動とても、全く此現象に過ぎないので、此意味意外に置かるべき興味ある問題としては更になく、單に此族類の喧嘩を無期限に繰り返すのみである、此國の戸口が年々減少すると云ふ事が若し事實であるとすれば、全く此邊に原因するのではあるまいか、斯かる分子を以て組織されたる此國の社會が如何に不健全にしこ



將來發達の見込みなきは云はずもがな、以て墮落せる族制がいかに社會國家、人類を惑亂し茶毒するかの一般を知るに足るべしである。

嗚呼一身の爲めに國家を犠牲とする國民は禍なる哉、抑も國を亡ぼして家を立てんとするは危い哉、大學の所謂國を治めんとするもの先づ其家を齊ふの誤釋、此國人に於て最も甚だしきを見る。

## 第七章

### 世界の遊惰國 (上)

今日主義以下の人間

長管怒々上下共に一日の安を偷み白日猶ほ惰眠を貧るは此國現下の狀況であることは

略ぼ讀者の推想に餘りあるべしとは信するが、吾人は筆の順序上其梗概を記せざるを得ないのである、素より彼等とても個人としての上より云へば悉く皆遊惰の輩を以て目すべきものでないのではあるが、先づ其大體より云へば遺憾乍ら遊惰の二字は到底免れないのみならず、此二字には確に重圈点を附すべき値あるものである、然るに此國に於て比較的多數を占る兩班族即ち貴族に屬すべき階級のものにあつては、全然優悠逸樂を事とし無事の百姓輩を苦むる外嘗て何等一定の職務に従事するなく、此點より云へば彼等は寧ろ遊惰と云はんより遊蕩といふ方適當なるべく、換言すれば遊惰と稱すべき資格だに無いのである、故に此等不生産的社會は姑く措き、此國にて當然生産的部族に屬すべき少數なる農工商や漁樵の輩に就てがらうである、彼等は無論下級社會の生活をなせるものゝみなれば、勤く共晨には星を戴いて起き夕には月を負ふ



て歸るの概はあるべき筈であるが、事實は大に之に反し、朝も概して早からず、又た夜は旅商の日暮らし位を除いては案外早く業を罷め夜業如きは婦人の裁縫、糸紡、洗濯等をなすの外酒家が酒を嗜む位の仕事にて一般人は大抵宵の口より門戸を閉ぢ、寢に就くのを常とするのである、而して彼等の所謂働き振りを見るに悠々として少しも勞するの色なく、又た絶へて繁忙の模様を呈するを見ないのである、試に途上行客の足振りを注意せよ、孰れも大跨の悠々寛々として如何なる場合と雖も決して急ぎ足驅け足の人を見るとは出来ない、若し夫れ農夫の田園に於ける工匠の工房に於ける、如何なる繁忙期節にても尙ほ且つ業務を執つゝあるや否やを識別するに苦む程にて、吾人をしてすべてこれ神仙圖中の人ならざるやを疑はしむるにても押して其一斑を知る事が出来る、左れば彼等の労働成績は最も勤勉なるものゝ一日仕事にて尙ほ我日本

人の半日仕事にも及ばざる可きか、然し彼等とても素日本人以上の体格を具へ且つ馬鹿に忍耐心強きものなれば爲さんとして決して能はざるの理由あるとはない、たゞ彼等先天的遊惰の風興りて之を爲さしめざるのみである、以上の如くなれば彼等に對し急ぎ事を爲さしめんとするも必竟失敗に歸するの他ないのである、何となれば彼等の仕事は素遊び半分にて我日本人の如く仕事を仕事として遣て退け、若し明日に涉るべき餘業あらば、お負けに夫れ迄稼ぎ越し、明日に至り多少の餘裕を得んとする如き快活の氣象夢にもなく、彼等は飽く迄今日主義を守り今日は先づ今日の仕事だに爲せば可也といふ風にて、よし少々の仕殘し或は仕後れ等の事ありとするも夫れには明日あり又た明後日もありといふ有様にて、其間如何様の事あるも強て取急ぎ埒明けるを好まない、此點に於て彼等は確に今日主義以下の人間である、斯る人間に對し 満足に



一日分の仕事を爲さしめんとするのは甚だ無理たるを免れないが強て之を爲さしめんとするならば勢ひ強壓を加へて嚴に之を監視するの他ないのである。

### 世界の遊惰國 (中)

#### 雨天休業

彼等は雨天に於て一切業務を執らない、开は彼等が雨天を以て神が特に人類に與へられたる休息日なりと信するからである、であるから雨天に於ける韓國はすべての事業悉く皆休止の姿であつて農夫は田園に耕さず、商人は市場に趣かず、樵漁は山澤に出でず、學童も書堂に學ばず、旅人亦旅宿に安臥して路上行客の影を絶つ、左れば雨天の韓國は一層寂寞を極め恰も人なきが如くすべての社會的干繋の發動を休止せらるゝので、雨天は此國に於て全く曆日以外に置かるべきものである、而して寒天、雪天

炎天等亦強て業を營びを欲せざるのみならず、平日に於ても金穀の存する限り即ち腹の太き間は晏如優遊を事とし決して勞するを好まないが、开が漸く消盡され空腹を感ずるに至りて始めて動く、彼等は絶對的に蓄積の念はないと云つてよいのである、換言すれば日々への字形にても食て飲んで寢て氣樂にもささへすれば拵はぬ國民であつて、今日食ふ米がないからとて別に顧着するやうな模様もなく、況して一文の儲蓄がないとて夫れをクヨク氣にするが如き少量の國民でないのである、此點に於て彼等の飽迄圖太くして奴腹の据り居るとは殆んど無双とでも云ふべく流石感心の外はない然れども誤るを止めよ、彼等は性來度胸の太きにてもなければ氣膽の据り居るのでもない、彼等は例のアラ、ソ主義にて夫れより外に致し方がないのである、現に我邦人ならば二日三日費すべき容積の事業も常に可成時間を節約して、一日二日にも切り上



げんとする風あるに反し彼等は出来得べきだけ時間を延長して一日分を二日分三日分にも分たんとするの傾きがある、これ兩個性狀の依て岐るゝ所以であつて我を積極とすれば彼は消極である、積極は繁榮を意味するが消極は終に亡滅に了らざるを得ない然るに又た一方から見れば我は餘り敏捷にして短氣に過ぎ彼は餘り遲鈍にして悠長に失するの風がある、共に缺點たるを免れないが、我の短所とする所は單に神經的に赤熱さるゝに止り彼の悠長は遂に遊惰と一致して救ふべからざる不治の病弊となるのである。

見よ彼等の病弊は單に遊惰を遊惰として已むべきものでなく、今や彼等の惰風は更らに一步を進めて飲酒、賭博、詐欺、竊盜、姦淫等あらゆる惡俗惡風となり盛んに社會に害毒を流しつゝある、殊に彼等は賭博を好むと甚だしく上下貴賤の別なく一般社會

に行はれ、竊盜の多きとも亦他國に比類なく、所謂小人閑居して不善を營むてふ古聖言の槍玉に懸りたるものであらう。

賭具には種々あるが重に骨牌とて獸骨を以て製したる方形のものに赤白の數の穴を穿ちたるトランプ形のもを弄ぶのである此國の内地を旅行すれば到る處の民家酒幕等苟くも多數人の會合する處には必ず此賭博を見ないことはない、其他萬人櫻と稱して我富籤如きものが盛んに流行し、下劣なる此國民唯一の娛樂となれる杯は以て此國民の品性墮落して虛榮を喜ぶの狀を見るに足るのである、或人が此國人の生活狀態を評して彼等の一半は賭博者にして一半は竊盜なりとの語は大に味ふべきものであらうと思ふ。

今日此國が言ふべからざる悲境に陥りて遂に興隆の見込みなからんとするのは種々の



遠因がなければならぬが要するに一國の主成要分たる生産者の数が少數であつて且つ遊惰なることに胚胎するといふの外はない、彼等は其先天的特性とも云ふべき遊惰から己れ自身を滅ぼし次に國家社會をも失はんとするものである、世に遊惰を以て産を破るものは多いが而かも遊惰を以て一國を亡ぼさんとする國民は吾人茲に韓國に於て之を見るのである、遊惰の二字實に何物をも滅盡すべき魔力を有せるものなることを吾人に示して餘りあるのである、實に寒心すべき事ではないか。

特筆して再言す、韓國は世界無類の遊惰國なりと、嗚呼遊惰を以て國を失はんとする國民は名譽なる哉、光榮なる哉、吾人不肖にして此以外の頌辭を知らないのである。

### 世界の遊惰國 (下)

#### 遊惰と服装

此國民が斯くも驚くべき恐るべき遊惰病に罹つて遂に醫すべからざるに至つたに就ては無論此國政教の腐敗が最も先づ然しらめたものではあるが、其服制及び屋制の如きも亦大に與て力あるものである嘗て或人の説に

彼等の服装たる上下男女の別なく共に純白の衣服を纏ひ居るにあらざるや、元來白衣は最も塵垢に染み易きものなり然るに衣服の汚るゝを嫌ふは素人情の常とする處なるが上、此國人の如く特に外貌を衒ふを好むものにありては自然勞動を厭ふに至る、必ずしも無理からぬ次第なり、又た彼等が内外の別なく常に頭上に戴ける冠の如き甚だ脆弱破壊し易きものなるに彼等の住屋たる僅に脊を屈め腰を二にして漸く入るを得べき構造となり其室内の如き至て狭く且つ低く怡も、獄裏にあるが如く窮屈千萬のものなれば彼等は常に戦々競々として生命の次ぎに大切の觀ある衣冠汚損



の保護に力めざるべからざる事となる、平時座臥の間に於て既に雨り、況んや労働の場合に於てをや、斯くして彼等の精神的状態は知らずくの裡其本来の活潑氣概を消磨し何事にても困憊姑息、儉安、怯懦、柔弱等卑屈の一方に流れ、好箇生人形然たる蕩抜けの殻の如き人物と化し去るものなりと

これ確に一面より穿ち得たる消息であつて吾人亦經驗上其言の大に當れるのを感じるものである、故に曰く韓國人の意氣地なさ加減を知らんと欲せば宜しく先づ韓國の衣冠を着用し韓國の煙管を持ち韓國の家に住し韓國の食物を試みざるべからずと、韓國の衣冠を着用し韓國的生活を續れば何だか韓國人に近寄りたる氣持がして或程度迄彼等が機微の眞消息を窺へるとが出来る

\* \* \* \* \*

吾人は韓國衣冠の制の美術的價値を卜するものにあらずと雖も彼幽靈然たる白衣黒冠なるものが飽く迄生産と反比例を呈し世より遠かりたる隱者、道士の類か或は祭官喪者の服に適するを見る外一般活動せる社會國人の服裝としての價値に絶對非認を宣せんとするもの也、然してこれに次ぐべき家庭、食物の如き亦た然りとなす、此國服裝の改正は韓國社會改良の第一義なるやも知るべからず、敢て江湖の識者に質す

第八章

酒

幕

(上)

朝鮮旅行をして先づ第一番に厄介にならねばならぬのは酒幕である、酒幕は韓昔チニ



マク又たスルマクと云ひ此國唯一の旅館とでもいふべきものにて、兼業には酒も賣り都鄙到る處其設けあらざるはない、一口に酒幕といへば一寸風雅に聞へて知らぬものには随分立派ろうに思はれるが、何の事はない、日本の田舎地方によくある百姓半分の木賃宿だ、否日本の木賃宿ならマダく結構至極であるが、實地に就て見れば二度吃驚、開た口が寒がらぬ程であるから殆んど想像以上の想像を以てせねば解らぬのだ兎まれ此酒幕は好箇の朝鮮學研究場とでも言ふべく此等の社會的状態を記するには逸すべからざる好題目と思ふから一通り其模様を寫して見やう。

一日旅行して疲れたる足を引き摺りく邑内に入り漸く酒幕の所在を尋ね出し其處にゆくど半ば傾きかゝつた草屋根の家に間敷は大概二間か三間位で定りの四十前後の女將が居る、先づ飯を命じ案内せらるゝ儘（其實案内せらるゝ迄もなし）例の土房に

入れば此處には早や先客の三人二人多き時は五六人もオド暗いカンテラ若くは牛油の裸行燈を点けた我三枚敷か四五枚敷位の處に雜然と座を占めて居る、ヤツト其内に割り込みれば天井は煤だらけに烟り、壁や敷物は塵埃だらけに眞黒く汚れ、一種の臭氣がブーンとして鼻を襲ひ不快の念を添ふ、主人の世話にて稍々新らしき蓆一枚を借り房の一隅に敷き、夫れに持參の毛布を伸し横るのであるが時としては後詰の客がツロくやつて來るので夫れはく大勢の人数となり、狭苦しい房が益々狭くなり、遂には立ちも動きも出來なくなる様な事がある、此等の客は重に負商とて少し許りの商品に背に負ふて各道を股に賣り廻るものや又たは地方の小商人労働者の輩が多く、稍々身分ある官吏などは特別の場合を除くの外大抵酒幕に投ずるとなく其土地々々の官吏の家に宿るのであるから此酒幕は宛然下等社會の定宿とでも云ふべく、外國人の外



素より良ひ客種のあらう筈はない、底に其不潔にして喧騒狼藉たるは實に言語に絶するるのである、先づ彼等風体の汚らしい事たる白い衣物の垢付きで殆んど黒衣と思はれる程で房に這入るや否や例の長い烟管を出し一種厭な臭ひのある地製下等煙草をつめ保ちをよくする積りにや其上に唾を吐きかけ、遠慮會釋もなく三方四方よりボン／＼燻べ立てるので殆んど座に居堪らなくなつて来るけれど左りとて別に空房がないとすれば致方がない、否でも應でも我慢をせねばならぬ、尤も斯る場合に斯る難儀を見るのは大抵韓國生活に慣れない連中であるから特に主人に相談して内房即ち彼等夫婦が寝る房を空けて貰うのであるがチト此國の事情に通じたものならば、別にろんな面倒をせず共結句寄り合宿の方が色々の珍らしい世間話が聞かれて却て面白いといふ風でトント其蠅いとも切ないとも思はぬのである、朝鮮旅行の最も困難なる點も此處にあ

るが又た言はれぬ妙味も此處に存するのである、又手韓人共を相手に面白半分浮世話をやつて居る間に一日の歩き詰めで大分空腹を感じ来るので頻りと飯の催促と出掛けると家人は一向半氣なもので、女將は何處かへ米の買入れに行きまた歸らぬとの事、これには少々驚き入るが此國の事情を知れるものなら、眞坂に腹は立てられず、ひもじい腹を押へて辛棒するのである。

## 酒

## 幕

(中)

元來此國にては夕方少し遅く宿に就けば大概残り飯はない、それは此國の風俗にて飯は一切量り切りでチャント一人前何程、お客何人分幾干といふ塩梅に前以て見當して炊くのであるから決して残りの出やう筈はない、それも家族の食事前でもあれば其方を都合して貰ふと云ふ事もあらうが、既に後の祭りとなつた以上は矢張り致し方がな



い夫れから飯米の用意杯も稍々富裕の家でもあれば兎に角、先づ大抵の家では其日々々の収入でヤット繋いでゆくといふ調子であるからチト大勢な客でもあれば先づ取り敢ず米の詮議からせねばならぬと云ふので頭からお断りを受けるなどは決して珍しからぬ事實である、サー左様なつて見ると今度は反對に客の方から頭を下げ、是非奈うかやつて呉れ頼むといふ風に下から相談と出掛け、漸くにして承諾を得るといふ場合が多い、これでは宛然主客顛倒滑稽とも馬鹿らしいとも言ひ様のなき次第であるが、これも事實でありとすれば致し方がない、であるから少々出来が遅いからとて滅多に苦情など云はれたものではない、又た實際苦情を持ち出して出来ぬものなら到底致し方はないのだ、若し迂乎下手な苦情を持ち出し他へ轉せねばならぬ事になり、行先の宿から又もや米の用意のない理由の下に謝絶される様な事であつたら、それこそ閉

口至極、不自由なる此國の事とて到頭往き處に困り又たく頭を垂れて先の處に舞ひ戻て来るより他ないのである、若し夫れが厭だとすれば余儀なく疲れた足を踏み占めても更に何里か前進するか或は退却するか二ツに一ツを取らねばならぬ事となるから内地に不案内の外客は先づ一の旅宿に投ずるとが出来たら、特別不都合のない以上は何でも運を天に任しヤレト安心といふ風に呑気に済して腰を据るに限るのだ、こう言つたからとて著者は決して酒幕の噴先生からコンモツションを貰つた理でも何でもない、贅言は休憩として其間には女将も歸り此度は亭主や下人などが持ち戻りたる米を臼に入れポツ／＼搗き始める模様、それ迄は先づ佳いとして、時によると粉からやり始める等の事も、事茲に至ては大抵なもの迄が持てた話にあらず、否斯く云ふ著者自身も千松腹を抱へ眼をバチクリさせ随分と辛き思ひをしたとがある、然しこれ



も到底仕方がないものとすれば、乍麼いふても矢張仕方がないのだ、否此邊が所謂朝鮮の朝鮮たる所たらうなぞ、此處一番度胸を据へ、平氣に澄まし込んで見ると妙なもの、其處は石臼の事ではあり、又た其精け方と云ても眞の好い加減に止るのであるから、案外早く杵音も止み、此度はガラ／＼と箸やじや碗の音なぞがして来る、ヤレ嬉しやと思ふ間もあらせず、朝鮮一流フワワリと出来立ちの飯を大きなサバル(井)に盛り、其他名物のキムチ(漬物)を首め二三の乾魚、獸肉等の副食物を添へ、方圓形若くは長方形の腰の高い黒塗の膳に据たるを女將、亭主、小供、下人等の手によりて運ばれ、各自の前にズラリと陳列されるのである、今が今迄腹の虫の疳積を抑へツツト堪へに堪へて待てぬ辛抱を繼續して居た事なれば此時の嬉しさは實に何に譬へんやうもなく、早速七や箸に手を掛け流石一流の山盛飯のキムチの辛味に屬まされ大牢の

滋味も同様、舌鼓打ち鳴らして瞬く間に平らげ盡すと云ふ勢ひ、側の韓人でさへ眼を睜て驚て居る位、又手飯が濟むと茶の代りにスンニユムといつて飯を炊いた後の釜のさらへ湯を呉れる、これは素より飯粒が澤山浮動して居るので慣れない中は何だか嫌な感じがして一寸口にする勇氣はないが慣るれば随分と宜いものである、殊に釜の底が少々焦げた時なぞ香ばしくて一層旨い。

酒

幕

(下)

以上は内地旅行に慣れた人の事であるが新米赤毛布とさては何分左右いふ理には參らぬ、先づ碗、皿、七、箸等の器物の何れかが必らず金屬製であると副食物の中に胡椒やら、萘等透鼠性のものを多く用ひ一種の臭氣を帶ぶる爲め大抵のものが到底食ふべき勇氣を失ふ、斯ういふ連中の内地旅行には宜しくパンに罐詰類を携帶すべきである



開は兎に角夕餐の膳も濟みぬれば座中の韓人中には疲れたまゝ寝込むもあり、或は例  
 の高調子に口角沫を飛ばして尙語り續けるもあり、或は骨牌を弄し或は歌ふもあるが久  
 之するも彼等は皆思合せたる如く苦多張て仕舞う、此に於て平豆の如きカンテラの下  
 に辛うして其日の日誌を録し携帶の本又は新聞の類を讀まんとするも燈光微弱にして  
 字形判然ならず兎や角して居る中に僅に頼みとせるカンテラの油盡き眩々の音を發し  
 て滅て仕舞ふ、マ、よ此上は寝るより外はなかりけりイザ寢に就かんといつても素よ  
 り我國の如く夜具等の備へある譯ではなし、着の身着の儘でゴロりと轉り、其處らよ  
 り荒削りしたまんまの木枕を手探りに探り出し、茲にスヤ／＼と安らかに夢路に入る  
 どでも云ひたいか、何が扱蚊や蠅は矢鱈にブン／＼と喊聲を作つて動揺めいて居る、ろ  
 れに先程飯を炊いた火氣が充分温突に廻つて身軀が焦げつきさう、それも冬ならば上

加減どでも云はうが夏どきでは實に堪たものではない、加之蚤や半風子先生何時の  
 間に臨光されたか脊中の邊に當てアロ／＼と運動を開始すると云ふ始末夫れ迄は  
 尙は可也として今度は床虫即ちヒンデといふ惡虫が徐々襲撃しかけるには到底夜の目  
 を合される處の騒ぎではない、早や矢も楯も堪らなくなるので半宵枕を蹴て蹴起しマ  
 ツチにて火を摺り見れば氣樂なる哉韓人先生、彼れ等は或は東或は西、或は縦或は  
 横交互錯雜恰も西瓜を轉がしたかの様シドロモドロの所体となつて雷の如き駟聲を發  
 し波路遙かに夢郷を廻つて居るのである、仕やう事なしに汗水垂らして虱狩りや南京  
 虫の防禦に苦心して居る間に明け易き夏の夜は鶏の聲と共に明け離れ翌朝になつて見  
 ると前夜薄暗き燈光の恵みに姿を隠せる穢らしい部分が容赦なく暴露せられ、且つ昨  
 夜迄は少しは何處やらに別嬪なりと思ひし宿の婢の案外醜きに驚くもかかしく歪み



し、缺土器の如きものにて洗顔をなせば怪しや鼻孔には煤煙堆き迄に附着せりよく々々考へ見れば正しく昨夜のカンテラより貰ひしものと知られたり、韓人の中には朝早く發つもあれど大抵は緩くりと構へ早くもなき朝飯の出来るを俟ち黒胡麻の如く群る蠅を追はんともせずシツカワ腹を拵へ幾干かの勘定を濟し悠然立ち去るのであるが、彼等の中には立去際に臨み間々飯代に何文かの不足を生じ負けよ負からぬ摺つた揉んだの大亂痴戯を演ずると往々にして見受る處である、處で其勘定といふのは普通並みであれば一食兼錢三十文若くは三十五文位我四五錢位で都會になると四五十文位の處もあり、又たズツト田舎へ這入ると二十文や二十五文位で濟む處もないではないが先づ普通平均三十五文一日平均百文余り（我十四五錢）に見て置けば大した間違ひはあ  
るまい、并して此國では別に室代とか宿料とか或は茶代（茶は素よりありもせず）と

か云ふやうなものは一切要せぬのであるから相當の食代の勘定さへ濟ませばサツサと出て行くのである、然し特別に房や食物に贅澤を云へば夫れ丈け當り前の勘定に計算して要求するものが例である、又た乗馬の客には別に馬房とて馬の糧秣迄拵へて呉れる比較的上等の酒幕がある、此等の酒幕は我國の如く別に一定せる屋號を有せるにあらず、唯單に何書房酒幕といふ工合に其家の姓を上に附して稱するのみなるが其營業はすべて妻君の支配下に屬せるので其妻君の立働さと愛嬌次第では随分最負の客も附き又たは人氣を取失ふともなる、假令ば彼の酒幕の主婦は取持ちが好いとか、悪いとか、飯の盛り様が奈うであるとか或は菜の添へ方が違ふとか、何處も變らぬ下馬評の妙な處に相場が定るので人氣さへあれば客の方でも自然二里や三里は辛抱しても其宿に投ずるといふ勢になるのであるから無愛嬌極る此酒幕の主婦となるのも此國に



於ては決して並大抵のとはあるまいかも知れぬ。

## 第九章

### 飲食物 (上)

豚犬同様の韓人の食物……多寡が馬の糞でも拾て食べるかの様に想像する人もあらうが夫れは餘り早台點に過ぎるので彼等とても矢張り米の飯を食て生きてる國民である知ての如く韓國は農業の世界である米の國である今日朝鮮米とし云へば誰知らぬものもなき程にて年々我大阪、神戸、馬關、長崎、對州等に輸入する額量は夥たしきものにて確に日韓貿易の首位に置かれ韓國に於ける輸出貿易の大多分殆んど全部に近き程を占めて居るのでも分る、然し朝鮮米と云へば蘭貢米か何かの様な所謂唐米同様に

心得て居る向もある様であるがこれは朝鮮米を知らぬもの、誤解に過ぎないので大間違ひの話である、朝鮮米は仕上げこる悪けれ値段こる廉なれ其質は至極上等にて味の如き甚だ宜しく敢て我日本米に譲らぬのであるが強て其缺點を言へば少し瘠せ形で油氣の乏しい位のものであらう、彼等は此米を以て主食とし外に獸肉、魚肉、野菜等を以て副食物となせると恰も我國と異らぬのであるが肉食の多い點は寧ろ我より遙か優て居るのである。

處で其米の飯なるものも皆悉く白飯と云ふ譯では勿論ない、此國では重に小豆、大豆等を交せて食すると非常に流行し下等社會にては多く麥、粟、稗等を混じ島などで

は全くの麥飯、粟飯、稗飯等を炊て居るのも多い、又た粥には米粥、大豆粥、小豆粥、粟粥、稗粥、肉粥其他餅粥、胡麻粥、松實粥等仙人臭いもの迄あるが其中肉粥、餅粥



を除く外重に貧民社會に行れて居る様であるが小豆粥、餅粥杯は味も悪くない  
 飯は矢張り三食の制(尤も以前は支那同様二食であつたらしい、それは此)であるが下等社會の貧  
 民などでは別に定つた事もない様だ、一日に二度食へることもあり一度食へることも  
 あり時としては全で食へないで濟す様なこともあるのみならず二日も三日もカラの行  
 して居る位なことは別段珍らしくもない事である

副食物の種類は獸鳥類にありては牛豚狗鶏の肉、魚類にありては明太魚、石首魚、太  
 刀魚等にして狗肉の如き重要な食物のみに數へられ、又た一般に鶏肉よりも牛肉を  
 賞し、鶏は雌よりも雄の値貴き等聊か我國と趣を異にする點である、特に魚類は  
 我國の如く鯛、鯉節の如きを賞せず却て我大刀魚の一種でもいふべき前記明太魚を  
 愛好す、此魚は北韓咸鏡の海に産する珍魚にて味は取て美といふ程でもないが此國に

ては正月盆會其他冠婚喪祭の儀式等には例として必ず用ゐられ又た平常と雖も好  
 下物として盛んに需用されて居るのである、野菜は凡そ我國と異なる所なきが南瓜、眞  
 桑、茄子等菓實的性のものを除く外大抵煮て食へるとをなす専ら漬物として用ゐら  
 れて居る

此漬物はキムチーと言つて朝鮮名物の一ツである、製法は時と品とにより多少異なるも  
 大概鹹其他の魚類及び例の胡椒を首め葱、生姜、蒜韭、胡麻等可成多類の材料を混じ  
 ければ味も案外美にして永く彼地に住する邦人杯は態々眺へて食てる向きも少くない

飲 食 物 (中)

黒じみたる羹汁に眞赤くなる迄胡椒を加へたる菜を添へ一種異様の臭氣を放ち一見嘔  
 吐を催するが如きものこれ朝鮮料理の特色とでもいふべきか、試みに其膳部の模様を



紹介せんに先づ大きなサマルとて我井形の碗に飯を山の如く盛り稍淺くして扁き井に汁を入れ外に鹽魚、牛豚肉等の一二皿其他大根、菜葉等の漬物二三種位あり膳部は可也賑やかな方にて一寸した酒幕(飯屋)の料理でも大抵菜の七八種位副はない事はない程で我の漬物一ツの朝茶漬や辨當飯などから見ると随分贅澤とでも云ふべし方であるが大抵のものは先づ其色合と臭氣とに辟易するのである

此國にて胡椒を嗜好するとは非常のものにて如何なるものと雖もこれを加へざれば味なしとして御けらるゝと云ふ風であるが殊に全羅慶尙地方は最も甚しい様である、隨て此國に於ける胡椒の需用は寔に夥しきものにて毎戸必ず之を植へるに菜園の大部分を費し秋頃收穫の時期になると筵や竹籠にならべ屋根の上軒先道路の差別なく干し乾したるが遠目で見ると宛で血でも流したかの如く如何にも亡國的光景の一ツに

でも數へられろうである、彼等は此胡椒を以て烟草と同じく南蠻國の原産で日本より渡り來りたる一種の毒草なりとし日本人は最初これを以て我國人を殺害する積りなりしもこれ却て邦人の嗜好に適し今日の様に全國に繁殖し盛んなる需用を見るに至りたりなぞ妙な處に勿体をつけて得意がつて居るが斯くも揃ひも揃つて有害物たる煙草、胡椒の如きものに全力を用ゐたる結果不生産的植物の栽培に多くを費さねばならぬ彼等國土田園の損害は幾干であらうか抑もこれを愛喫する彼等精神上の損害は幾干であらうか恐らく支那人の亞片烟に於ける害毒に劣らぬとであらう

若も彼等の悠長病が心靈上或る貴重なるものを失ひたるものありとすれば、それはこれ等のものが最も其因をなせるものと云ねばならぬ、返すくも其愚や及ぶべからずして終に最も可憐の感あるは彼等である



## 飲食物 (下)

次には油にて胡椒と同じく大概なものは油を加へて調理せらるゝのである、元來此國にての料理法は或程度迄は全く支那式にてすべて醇醱なるものを好み淡泊なるを喜ばぬのであるから其處に油の需用が大に生じ來る譯にて何でも蚊でも一切油を用々たがると猶ほ我國にて鏝節を用ゐる如きである、而して其油の種類は胡麻油、蓖麻油、等は植物性油其他牛豚魚油等の動物性油も多く用ゐらるゝのである、酒は藥酒、燒酎、濁酒等の種類あり、藥酒は其名の如く桂皮其他の藥味を混じ稍々口に適すれども、燒酎は甚だ強度のものにて多く飲むに堪へず、濁酒(一名をマツカリ)と云ふに至ては我ドブコクとも云ふべきものにて稍々酸味を帶び専ら下等社界に行はる。

餛飩の類は糯米、粳米にて製せる兩様あり概ね不整形のものにては蓬、麥芽等を混せるもあり、別に餡を用ゐず、外皮に小豆、大角豆、大豆の粉等を附着し、又は南瓜柿、栗等を附せるもあれど孰れも味劣等なり、味噌、醬油の原料及製法は概ね我と異なる所なきも、戶外にて日曝らし雨曝らしを爲すを以て一種不快の味あり、到底我邦人の口に適せず、菓子に殆んど絶無の姿にして僅に餡あるのみ(日本にていふ朝鮮餡にあらず)近來に至り我玉椿糖、駄菓子、餅、饅頭の類盛んに彼等の間に賣れ行くを見る、茶は一部の上流社會を除きては専ら僧侶間に行はるゝのみにして多く生薑を混するの俗なり



# 第十章 市場

韓内地を旅行して最も奇異の觀を添ふるは市場にて其處には柁しげなる數十百の露店併列して數百千の人の山を築き、賣るもの買ふもの、往くもの歸るもの、肩摩駁擊喧々擾々として寔に名狀すべからざる雜踏の狀を呈して居るのである

市場に於ける商品の重なるものは、内地産としては穀物、紙、銅鐵器、土器、綿布、麻布、煙草、煙管、草鞋、野菜、菓物、乾魚、鹽魚、薪炭、鹽、牛豚狗肉、鶏の類、輸入品としては金巾、絹織物、紡績糸、燐寸、卷莖、陶器、石油、金物金具類、眼鏡、藥粉、菓子等にて凡彼等の日用品一切は物として陳列せられずといふとなく、外に俄造りの酒家、餅屋等も出來、宛然日本の田全市でも觀る如き景況を呈するのであ

る、夫れは各家共此季節を迎ふるの準備を要するからだが、平生にありても各地無數の小市場中には必らず中央の大市場と云ふべきものあり、三南に於ては先づ慶尙道の大邱、忠清道の公州、全羅道の全州及び南平市の如き最も著名なるものである、此等中央市場は重に地方商人の集りて元仕入をなす處にして市場の規模最も大きく、隨つて貨物の集散亦余程の巨額に上るのは言ふ迄もないとである、そこで一旦此中央市場に於て仕入れをなしたる地方行商者は順次其市日を追ふて四方に出向ふのである、例へば中央市の開市日が一六日なりとすれば、其最近距離にある市場が二、七日、其次が三、八日、又た其次は四、九日といふ鹽梅に秩序よく四方に展開するものが出来るのである、斯くて五、十日ある、彼等は老幼男女の別なく、南より北より西より東より旁午絡繹或は米を賣りて布を購ふもあり、或は薪を鬻て魚に換るもあり、皆夫れく



來市迄の用意を整へるのである、此市場は全國都鄙到る處其設けあらざるはなく此國にては有無相通じ剩缺相足すべき唯一の商業機關とも云ふべく、地方人民はこれが爲め多大の便宜を享受するのである。

市場は所謂負祿商の一團と地方農商民との混同にて大抵朝より開き夕刻に至り撤するので雨天の外休むとはない、市日は毎月六回（京城市内の如きは毎朝開市せるが地方によりては六回より尙ほ少數なるもあり）の例にて例令は一六日、二七日といふ工合に各市夫れ々々一定の日を設けてある、毎年此國の二大節季たる盆正月前になると平生より數層倍の盛に當る、市場を經過する頃には曩に仕入れたる商品も早盡きたる頃となる故、此度は其行先地の産物を求め、相當の返り荷を拵へ、再び一、六日の中央市場に引き返して賣り捌き、茲に新らしき商品を整へて出掛けるといふ筆法にて、

此點につき市場の散布加減は恰度此行商をなすに都合よく出來て居るのであるが近時鐵道等新交通機關の設備に伴ひ、従前の市場散布の狀に多少變動を來したるもある、内地行商をなさんとするものは、此市場及び市日の工合を心得置くべき必要がある。

### 第十一章

#### 店 舗

此國の商業は全然市場時代にあり未だ店舗時代に達せず、又た賣買時代と云はんより寧ろ互換時代に近しと云ふ方適切なるが如く、現に此國に於ては京仁等の二三都會を除きては店舗らしき店舗を見ず、例の露店に均しき艸鞋、乾魚、烟草、等を鬻るを見るもいふせの小店の衰れげに散在せるのみである、



此國に於ての日需品一切は皆悉く比較的低廉にして品物の揃へる市場の供給を仰ぐの例にて、店舗は單に臨時入用不足を生じたる場合若くは其日暮らしの細民、或は旅客等を相手に些少の商賣を爲すに過ぎぬので所詮補助的性質の商賣である。此國の語に賣るてふ語を買ふてふ意義に使用するとがある、并は一個の品物即ち貨財を以て貨幣即ち一個の品物を買ふてふ觀念を示せるものにて又以て此國商業思想が如何に幼稚の域に彷徨せるかを知るに足るべしである、隨て商品の性質、通貨の價值、効力等彼等未開なる腦裡には未だ充分解せられざるものゝ如く、國民の經濟的智識なるものは全然零である。

## 第十二章

### 韓人の日本觀

#### ▲居留地韓人の日本觀

は大分進歩して居る様に見受けるが内地に於ける韓人の日本觀とさては是れは又た格別なもので實にお咄しにも棒にもかゝらないものが多い今其二三を書いて見るも時節柄面白く且つ趣味あるとならんと思ふ

#### ▲ズット田舎の韓人

中には未だ日本といふ國名すら碌に承知しない連中が

澤山で「イルボンサラム」(日本人)で通じない場合が屢々あるはどういつたら判るかど云ふに「倭國」といひ「倭人」といふのである現に居留地を少し許り踏み出すと「倭國」とか「倭人」とかいふ語が盛んに行はれて居る「倭奴」などいふは必畢其惡語である▲又品物など呼ぶにも 日本製の分は大概「倭」の字を冠ふされ居る殊に可笑

いのは「倭物」と云ふ語が單に日本製品を指すの語にのみ使用されるゝにあらすして内外一般の物品の粗悪より人品の怪異を評する通用語となれると猶ほ我邦にて「舶來」なる



語が一般の良品又は婦女の美容を意味する語になると同様にして而かも正反對である

▲品物に關する智識

は日本人は到底倭物以上のものを製造し得ざるものと

信じ居れりこれ甚だ笑ふべきに似たりと雖も以て其日本雜貨が彼等の眼よりもいかに粗製亂造にして且つ劣等品視せられつゝあるかの一端を窺ふに足るべしだ

▲が我々に向て我々の歴史

を語るのは彼等である否歴史を語らない迄も歴

史的回顧を興へるのは少く共彼等語習の然らしむるのである現に倭冠といつて我輩の祖先が朝鮮支那などの沿岸を荒してあるいたのは彼等の腦裡に蠻的記憶を強からしむる材となつた

▲ダカラ「倭」といふ國

は今以て夷狄の國の様に誤解して居る者が段々ある

シテ彼等の所謂夷狄とは孔孟の教を奉せないものゝ謂で一層明瞭に云へば男女老幼の

別も知らず人情もなければ道義もない丸で鬼神の様に怖ろしい譯の分らない食ふて飽くことも知らねば交るに禮も解しない族類なるかの如く思つて居る

▲ソコデ日本を知らない韓人

が日本人を始めて見ると日本人は抑も何を

食て生きて居るかなど、唐突に奇妙な問を起すことがあるソシテ日本人の顔面から足の爪先迄撫で廻はして見るが通例であるが畢竟東夷の人もタイハンサラム(大韓人)の如く耳目口鼻を具へ而も眼は横に鼻は直ぐに各々五本宛の手指足指を持つて居るか否かを検査するかのようである

▲検査した結果

倭人も自己等も體格の組織上に於て寸分違わぬ事を確め得た

彼等は實にく不可思議でならぬ顔付して呆れ返ると同時に倭人に對して少しは安堵の念を拂ふのである



▲間には日本といふを生嚙り 　に直ぐ居留地のとかと早合點して居る者もある現に我輩に向て日本は我邑内より少し狭いなど、眞面目で話す男がある驚かざるを得ずではないか又た我輩が日装して居る比の事であつた。

▲田舎の或る酒幕 　に慇懃韓語で話を仕掛ると酒幕(酒店)の嬪先生餘程何かに感じたと見へ我輩の貌を頻りと見詰めしばし無言で考へ込んだ後我輩に向ひ日本と矢張り言葉は朝鮮と同じきかとの問を發したイヤハヤ恐れ入るではないか尙ほ

▲日本人に對する彼等の疑問 　は随分面白くて且つ奇妙なのが多い假令は日本人は兄の死後其未亡婦を弟が迎へるろうであれは確に蠻風ではないかといふ類である此疑問は彼等の間に著しく感ずる所なるが其返答にも又一寸困まる所である第二は

▲女子嫁して男子の家に往けば 　其儘男子の姓を冒すことにて彼等は之を不思議に感じ居る摸様なるがこれは成る程一理ある話で彼國では内戚外戚の區別が

厳明であるが故に同姓相嫁が所謂一寸二寸の親族一目明哲で血統の如き比較的整然たる觀ありた第三は

▲火葬の事である 　日本人は病者未だ死せざるに火もて焼き殺す云々これは

傳染病患者を避病院に移し死せば直ちに火葬場に廻すを誤想せしものと見へるシテ韓人は僧侶の外未だ火葬の制なく一般に皆土葬を奉じて居るのである夫れから茲に

▲最も噴飯の料たるべきは 　日本人は大抵婚禮の式を行はず兩姓イム加

減な處で喰ッ付き合ひ本人連れの約束が成立すれば女の方から早速カバンか風呂敷包の類を提げて男家に罷ッ出るなりとの噂さであるいづれ居留地邊惡習俗の罪であら



うが左りとは慨すべきではないか又た

▲別箇の質問として 必ず提起し毎に我輩の大目玉を頂戴するのは畏れ多い

事乍ら日本國王の姓は徐氏でないかといふのであるこれは支那秦の世に徐福といふ人が不老不死の靈藥を求むべき使命を帯び今の濟州島を経て日本へ入朝し王となり遂に還らず云々の記事が朝鮮歴史に存して居るからである

▲今一件の大切なる疑問 は平秀吉小西行長加藤清正等の子孫が今に存續し

且つ兩班族として尊敬せられつゝあるや否やといふのである征韓當時の事は種々の口碑や記録に傳られ流石の彼等も容易に忘れて居ない

▲以上は彼等の 「日本」及び「日本人」に對する疑問中で最も普通なるものゝ概畧であるが彼等の淺薄幼稚なる念頭より浮び來る揣摩臆測は實に種々の次第であつて

到底書き立つるに際限なき程である

## 第十三章

### 韓人一夕談

△朝鮮人の挨拶振りは 一度彼地に渡航されたる人の先刻承知せらる通り先

づ大体に於て婉曲とでもいふべく中々抜け目のなき方で其平生詞の如き一通り一定せられて居る

△が其筆法は 例の「御飯か喰べなさいましたか」「夜前は無事でありましたか

」「其間は平安でいらつしやいましたか」といふ類にて極めて單調のものゝみであるで



之れを約言して見れば

△矢張り生きて居るか といふに歸着して現に彼等の言葉に注意して居ると平生でも生きる死ぬるといふ様な極端の言葉が非常に多く我等の耳には一ト際聳へて聞へるのである

△戦國の世ならイザ知らず

無事太平の世の中而かも牛豕と伍してノンキに暮らし居る場合に生きるの死るといふ様な惨酷の語の多いのは餘り感服したことでなきのみならず文明の空氣を吸へる我々には何となく不祥の様に聞へ又拗く共

△人種の野蠻を意味せる

様に感ずるのである以て此國の民人がいかに飢餓的膏盲に陥て居るか又たいかに國家的瀕死の末業に際して居かの一般が察せらるゝで

△韓人の語に食べる

てふ言葉の多いのは一寸耳立つて聞へる左に擧げるのを見たら韓人がいかに食的國民否空腹的國民なるかの一斑が解せらるゝであらう乃ち

△第一の挨拶

がチーチーチャツブスグツツ(御飯お喰べなさいましたか)で風を引いた時かハラムルモオツツ(風を喰べました)又はカムキモオツツ(寒氣を喰べました)といひ親切を戴いたといふにはマームルモオツツ(心を喰べました)

△儲けた時が

トンモオツツ(錢喰べました)若くはイーモオツツ(利喰べました)で水に濡れたのがムルモオツツ(水を喰べた)といふ鹽梅式である甚しきに至

てはサラムルモオツツ(人を食べました)なといふ亂暴極る語もある

△其他モオツツ、チャブツ共に(食べる義)つく言葉が甚だ多く一々枚擧の追もない位であるが就中食錢、食風、食心、食水などナント面黒ではないか以て此國民人が



いかに

△**乞食的根性** に陥て居るか又たいかに飢餓空腹的であるかの大略が推せらるゝではないか嗚呼此可憐なる國民は今や慢性的脾臟病而かも其膏盲に陥て居るのである心理的飢餓に迫て居るのである知らずこれに對する國手の診斷は如何抑もこれに投ずる者婆の配劑は如何に

△次に書かんとするは 所謂ナツブマル(惡口語)の事であるが此國に於てナツブマルの多きは實以て呆ざるを得んやである

△日本にては 大概人の惡口を叩くには此奴、彼奴、馬鹿、畜生、外道、阿呆阿魔の類であるが此國のは又た一種

△**風變りで面白い** すなはちイノム(此漢)チモノム(彼漢)チヤイシキ(子息)

マハンノムチヤイシキ(喪家子)ホロチヤイシキ(訛りなれば解し難し)チアドルノム(我子漢)ケイアドルノム(狗兒漢)マルアドルノム(馬兒漢)トートクアドルノム(盜兒漢)モツチンノム(狂漢)チラルカツドンノム(狂人同様漢)ベモンクシン(病人)パーサクキー(八朔兒)等

△**其他** ヌンバヂンノム (飲眼漢)コバリヤンノム(飲鼻漢)セーバヤンノム(脱舌漢)ホリンノム(棄漢)等一々數へ立てても出来ない程である内につきパーサーキク(八朔兒)なる語の意義を尋るに小供は通例十ヶ月を以て生み落すものなるに八ヶ月を以て生れた子即ちタラヌと云ふ意にて猶ほ我邦にて

△**天保錢**などいふが如し である又たチヤイシキアドルノム(共に子供をいふ)なほいふ言葉の多く交れるを以て見れば此國に於て、子なる者がいかに最下等の



動物として賤まれて居るかいわかる 従て小供に對し一種同情の感なき能はずである  
 △論より證據 此國の所謂チモンガク(總角)アギ(阿只)共小供の義……たるもの  
 状態を見れば蓋し想ひ半ばに過るであらう

### 湖南兄に與へて内地生活の 趣味を語るの書

湖南兄足下

昨日けふの暑さいかに思召すや、日本ならば正に避暑旅行海水浴等と騒ぎ立て、あれ  
 ら一年中の安息日といふなる結構なる夏の日を、われと奔命に疲るゝ笑止の時なるを  
 ろれには近き木浦の君は、いかに此頃の日を消さるゝにや、こゝ錦南の閑堂樹青く水  
 白き處には白衣黒冠の新生活、日は正にサラムの烟管のろれよりも永く、膝下にまつ  
 わる兒童呬語の聲は蟬聲と共に絶ゆるなし、いでや自然のバラダイスたる錦城の夏を  
 紹介して紅塵白尺の裡に蒸殺されんづる君に一掬清涼の微風を送らんかな  
 租界にて貿易商が算盤の塵を拂ひ役人様が官服の扣鈕をしめ、鹿爪らしく其日の準備



に取掛らるゝの時は、こゝには自然の音楽たる清らかなる鳥の鳴く音を耳にし、小園には朝靨の花美しく、朝露に酔ふて筆の如き苔を破り紅紫濃淡瀟洒落の趣を添へ租界にて下午一二點時計懶げに響き、人々は氷、ラムチ又はビール杯を冷し、おかみさんも書房ニムもンドロになりて午睡の世界にあらん時、此處には縁陰幽かに蟬聲を送りて兒童誦語の聲に和す、且つ夫れ清風徐るに至り蒼蠅取て迫らざるの時、書櫃に臥して眞桑數影を呼べば腋下風を生ずるの概あり、租界にて一日の戦に疲れ湯屋の蒸氣濛々として店方の小僧は未だ仕舞方に目を舞すの時、こゝには例の錢入らずの冷水浴をなし満身の清快を買ふて門前に彷徨へば、鳳仙花、白粉花等更に滴らん斗りの愛を呈して打水の清きに媚び、村翁遊子は杖を止めて尙ほ去らず、租界にて瓦斯燈の光眩く妓樓には三絃の音賑かにして狼藉の態を外に露はし、ハイカラや、ヒョット

コや、番頭や、お三や、猫や杓子迄が團扇片手に晴浴衣の散策に出かける時は、こゝには漸く穩かなる夕餐の膳を濟し、平床上に安臥して集り来るサラム達ちと豆ランプの下趣味ある詩話や桑麻の談をなせるの時なり  
若し夫れ曉霧錦城山巔を罩め、東天未だ紅けず、鶏犬の聲四方の草家より聞ゆるの時新鮮なる空気に唸囀し柔軟なる夏草を伴侶に静かに南山の邊を歩す、何等の清新や鶏聲一番屋根上に起り、日は正に午ならんとして衆童は皆散じ農夫は田畦に憩ひて、午餐の運來を待ちつゝ煙管を含まん時、鶴髪のお翁と書堂に對座す何等の閑雅や、清泉掬すべく眞桑冷せる邊に至れば、赤蜻蛉一つ安らかなる夢を小樹に宿せる何等の幽致や、新月月井の峰頭にあり、満庭の艸花ハラ／＼と紅を點するの時、地平線下に沈み行く夕陽を駄送して遙に牧童アレランの歌曲をきく、何等の悲愴や、星斗蘭



干として人の魂の如く、唧々たる蟲聲露に咽べる野路に人知れぬ一箇の瞑想を辿り  
更深けたる東門外邊の夜色に逍遙す、何等の静寂をや。

嗚呼清新、閑雅、幽致、静寂等あらゆる消夏の産物はすべて籠りて天帝の懷に近き  
内地の世界にあり、予は獨り錦城の草廬に於て此清絶、美絶、眞絶なる自然の大觀を  
恣に領有するを誇るなり、而して又た甚だるれを惜むなり（明治三十七年八月記す）

於羅州南山洞齋魚齋

朴 大 愚

附 錄

韓國みやげ一夕話

はしがき

余此頃所用ありて韓國より歸來し、大阪の地に淹留するに數旬、一日書肆輝文館の主人余が寓居を訪づ  
れ、談偶々韓國の事に及ぶ、主人示すに沖田錦城子の筆に成れる「裏面の韓國」を以てし、且つ曰く近日  
之れを印刷に附し以て世に公にせんとすと、余受けてこれを通讀するに、流石は錦城子多年韓國に在り  
たる丈けに、裏面の眞相を描くこと極めて詳かにして、復た遺憾する所をなし、然れども人は十人十色、  
その眼に映ずる所各相異をらざるを得ず、依て余も錦城子の筆に倣ふて、聊余の眼に映した韓國みやげ  
二二三つを書いて見やう

時は乙巳の春三月

大阪の寓居に在りて

雪の舍あるし誌

韓 國 一 班

誰かトソ言ふた、清國を觀た目で直ぐと韓國を觀ると、丁度珠玉を見た後で瓦礫を



見るやうな心地がすると、これは眞に適評であるのだ、清國はあれで世間からは色々につまらぬ様に言はるゝけれど、何しろ國は頗る大國であるし、其上國民も相當に氣力も智慧もあつて、加之に彼等が商賣に掛けて抜目のないことゝ云つたら、殆んど世界一とも言ふべき程で、隨て金持ちも亦た少くない、何處かに奥床しい所があるが、韓國と來ては上下通じて素ツ空乾の、夫れはくゝお咄にならぬ、先づ早い咄が日本から初めて渡航するものゝ、第一に驚くのが彼等の起臥する、家屋の如何にも憫れすばらしいのであらう、但し夫れが如何にお粗末千萬であるかは、錦城子の豚犬的生活にも、詳しう書いてあるから、今更のやうに言はずもがな、讀者は篤に御承知でもあり、併しながら初めて船の中位から、その濱邊や山の腰に點々散在するのを見た時は、また日本人は一体に、韓國を買ひ被ぶつて居る丈けに、韓國の到る處が總て悉く

あの様に、お粗末なもの許りとは思はぬ、先づ其人の意中はコゝであらう、日本でも随分島々の端々に到ると、蚕が伏家の夫はくゝ見る影もなきものがあるのだ、只それを見たばかりで、日本國の全体が皆斯の通りだと、早合點するところが出來ないと一般た韓國も都會の地は勿論、少しく内地に這入り込んだならば、定めし大きなソシテ奇麗な家屋もあるであらうと、幾ら最負の引き倒しでも、韓國丈けはソゝでないのだ、勿論多少は家に大小の相違ころあれ、都鄙も押しなべて皆この豚固屋に均しきもの許りだと聞いては、豈夫れ驚かさざるを得んやであらう、夫れからその家の主人公達は、さて如何なかと云ふに、是れ又一層甚しいもので、眞に是れ個人主義の骨頂者、國家と云ふ觀念や、愛國と云ふ機なもの、爪の垢程もないで全で無智無氣力の人民で只纔かに頭に黒冠を戴き、身に白衣の韓服を儼めしう着けたと言ふ許り、誰やらの言



ふた狝猴にして能く冠すと云ふの類で、主義もなければ主張もない、夫れはく奇麗なものだ、只毎日のやうに、朝から晩までいふせきこの豚固屋の中に蟄居して、長さ烟管を銜へ、いとも悠長にスパタ／＼と遣つて居るのと、其間にはグビリ／＼睡眠を貪る位のものだ、夫れ故常時も喰ふや喰はずの乾空乾、所謂一簞の食一瓢の飲、人は何れも其貧に堪へねど、韓人のこれに以て平然たる所は、流石に韓人の韓人たる所以んであらう。

國は民を以て本と爲す、民の富は即ち國の富てふ筆鋒から言ふならば、韓國が斯る貧弱極まる國民に依りて、成立たれてあるかを思へば、韓國の國家も頼りない實に心細い譯で、世間から色々世界無比の貧弱國などと鼻しめらるゝも、實に無堪ならぬとこれど、是れでもズツト太古から、こんなに許りでもなくて、随分隆盛を極めた時代も

あつたものが、年と共に漸々退歩して、遂に今日の状態となつたものかと思ふと、餘所ながら見る目も實に憫れ氣の毒な譯だが、抑も是れは誰の罪であらう。

### 官府とは只名のみ

官府と云へど概ね我邦で見る古寺のやうなもので、何時の時代に建築したのか、トントラの年代さへも知れぬやうなものが多い、而かも一体に外觀許りは存外壯麗しく、殊にその門と來たら、丹碧で以て粉彩つた中々立派な上に、標札のやうなものも只檜か樺の白木板に、墨で書き流したものは皆無で、是れ又何れも神社佛閣の扁額にでも見るかの如き手のこんだもの許り、見慣れぬ日本人の眼には、何か一ト廉の由緒でもある寺かの様な心地がする、夫れから門を這入つて、其内にある廳舎と云ふのを見るに、何かはなしに無王の古寺の儘で、柱は傾き所々壁は落ちて、屋宇雨漏るも



一向に構はぬものゝ如しである、而かも其古く壞れ掛つた家が、幾つとなく仕切られて、其入口には司聽廳とか何とか、色々譯もわからぬ標札が掲げられてある、ソレテ其中には只纒かに古き卓子の一脚に、腰掛の一つもあれば上等、それすら全くないものが多い、勿論事務員らしいものも居ないから、ハテ是れは廳舎が餘りに朽腐した爲めに、他に引越してもしたものかと思ふと、ソレでもない何處かに人聲の洩れ聞ゆるので、其聲をしるべに辿り付けて見ると、公務の時間とも云ふべき眞白晝に、額を鳩めて朝鮮將棋を闘はすか、左もなくば仕樣もない雑談に打ち興じて居る杯の有様は、官府といへども只名のみで、毫も行政の實務として見るものゝない事が知らるゝ、尤もソレモ其道理、御本尊の中央政府ですら、名こそヤレ農商工部であるの、又は度支部であるのと、色々喧しう官省が設けられてあるにも拘はらず、一として實務の擧つ

たものゝないのが何よりの證據だ、元來中央政府が先づキツチリ行政の方針を定めてころ、地方の官府までが皆夫々に、事務の取扱方が判然と定つて來る譯なのに、今は中央政府が前申す通りの有様であるから、地方の官府に何一つ事務の取扱ひやうのないのは、決して無理からぬ咄だ、然らば地方官吏平生の職務と云つたら、さて如何な事だと云ふに、先づ人民から一年二回の田租を徴收する位が關の山で、其他は時々無辜の良民を虐げて、ろの膏血を絞り以て自己の懐を温める位のものだ、此處に至ると又黄金の力の一層有難味が知らるゝ、と云ふのは、韓國では悪い事は仕放題、ドンナ殺人罪のものでも、黄金さへ出せば容易に其罪を免がるゝことが出来るのだ、ソレテ人民はろの暴戾なる收斂と無辜の冤罪に逢ふことを厭ふの結果が、今日の如くアララン主義に甘んじて、只ドーかコーか其日々々々を無難に送りさへすれば可いと、全で



自暴自棄個人主義の骨頂者となり切つたのではなからうか、而して韓國の官吏が、一般に斯くも暴戾極まる、腐敗の極に至つた、抑も其原因は如何んど云ふに、是れは例の官吏の任用が近頃でころ、人材登庸なると大分喧しう云ひ居れど、まだ金銭で以て官職を賣買するの餘弊が止まぬので、先づ地方官吏の相場が、假りに五百金とすれば、之れを買ふて官吏となるものゝ目的、仁政を民に施して民を塗炭の中から救ふて遣る杯と云ふ様なことは寸毫もない、結局五百金の資本を投れて、七百人も八百金も取り込もうと云ふ、我利一偏の根性から割出した官吏だから只人民の膏血を絞ると許りに熱中するも無理からぬとた、然らば民は斯る虐政の下に居なくとも、家を擧げて他に引越したら如何ぢやといふものもあらうが、上は中央政府の大官から、下は地方の小吏までが皆斯くの如しで、之れを避けんも避くるに所なく其冤を訴へんも亦た訴

ふる所なく、已むを得ず泣々も斯る苛政の下に、終年を送らねばならぬ其人民ころ、實に憫れ至極のもので、苛政は虎よりも暴なりとは、蓋し此等不幸なる民の口から發せられた嘆聲ではないかと疑ふ程である、實際政府はあれども殆んど無いも同様、且つ官吏の暴戾腐敗斯くも甚しいと聞いては、孰れか復た呆然たらざるものあらんやであらう。

### 秃山と温突

韓人の家屋と云つたら實にお粗末千萬なもので、その建築材料と云ふのが、纔かに樹の皮を剥いたばかり、碌々削りもしない丸木其の儘のものが多し位であれば、此家屋を建築爲めに、ソ一山林の樹木を悉く伐り盡したと云ふ譯でもなからうに、韓國の山と來たら、オット人家を懸け離れた山奥か、左なくば禁伐の官有林を除くの外は、何



れも赤裸々たる禿山ばかりで、見るからに國の貧弱を表白して、如何にも無趣味極まるもののみである、一説に據れば、韓國は古來虎の多い所で、山に樹木を繁茂さすれば、ソガ虎の潜伏所と爲つて、人畜を害すること甚しく、夫れ故樹木は何れも稚木の間に皆之れを抜き取つて生長させぬから、ケ様に樹木のない禿山ばかりじやと云ひ又一説に據ると、韓國の山々は何れも火山岩から出來て居つて、地質上の關係からして、假令造林の經營をしても到底樹木は繁茂せぬとも云ひ或は又林政久しく廢れて、少しも其等の取締がない爲めに、濫伐の弊甚しく其結果ぢやとも云ひ、一つも取纏まつた咄はないのである、尤も以上は何れも多少其原因となつても居やうが、吾人の觀る所では、韓人の家屋が例の温突構造であるのが、重なる原因となつて居ると思ふのである、何故と云ふに、夫の温突は單に冬季の暖爐代りにはかり出來たものでなく

て言はゞ日常飲食物の總てを、皆これに依りて養焚するのであれば、此温突の下を燃すとは、年間晝夜の別なく殆んどノメツである、随つて其燃料と云つても少小でないのだ、然るにそれが悉く柴薪と樹根と云ふのであるから、彼等年中の仕事もろの大半は、此燃料の調達にあるのだ、而してこれには例の林政と云ふものが全でないのであるから、其山が誰の所有たるを問はず、勝手に山に這入つて柴薪を掻き浚へ、柴薪にして已に浚へ盡せば、更に枯木と否との差別なく、手當り次第に樹根を堀り取ると云ふの始末で、是れが抑も山林の樹木をして、ろの生長を待たず早く枯死する所以であるのだ。

元來山林に樹木の鬱蒼たるものあればこそ、四時の眺めも麗はしく、只夫ればかりが能く雨水を其中に貯蓄するとも出來、且つ井が源泉氾々として晝夜の別なく流れ出



以て其國土を潤澤し、爲に五穀も能く豐熟する譯なるに、韓國の山々（全体とはいひぬが）は能雨水を貯溜せんにも、貯溜すべき樹木なく、隨て霖雨一たび降時は、倏ち洪水田野に汎濫し、爲に田圃を流失し、其人畜に害を及ぼすこと云たら實に甚しいもので、其弊害は獨り韓國の山々をして、赤裸々たる秃山と化せしめ、山河の眺めをして只没趣味ならしむるばかりか、其國土をして涸渴せしむるものも、其原因は全く此濕突にあるので、韓國に由來農業の發達せぬのも、其遠因はと云へば矢張り此濕突にあるのだ。

世の韓國經營を談ずるもの、口を開けば直ちに農業の改善を説き、中にも氣早い連中は現に渡航し、國の各方面に向つて切りこりの經營を實行しつゝあるやうである、韓國の如く其國柄が、農本を以て組成せられた所では、農事の改良は實に適切などには

相違ないが、愈々本仕掛けに遣らうとするには薄志弱行の徒では六ヶ敷い、先づ洪水汎濫の害を防ぐ爲めには、河岸に堤防工事も必要であらうし、又は貯水池の設備も必要であらうし、其中でも現在の秃山に對して造林の經營を爲すなどのことも急務なのであらう、併し造林經營を爲さんとするには、更らに林政を設け以て樹枝と樹根との濫伐濫取を嚴禁せねばならぬ、而して之れを爲すには、家屋の制を定め以て夫の温突構造から、先づ改良せんければならぬ事だと思ふ、が併し今日韓人の幼稚なる耕作法でさへあれ丈けの米を産するであるから我内地の完全なる方法を執れば今の儘でも幾倍の増收を見る事は容易などである事は堅く信する處である。



## 教育と載冠

韓人の無智蒙昧のたと云つたら、是れ亦實に甚しいもので、其原因はと云へば無論教育の方法が、宜しきを得ぬ爲めと云はねばならぬ、尤も京城と其他各開港地附近の韓人部落には、稍々見るべき學校のないでもないが、开は何れも日本人の設立したもので、韓人側の教育法と云つたら、日本に於ける舊時の寺子屋教育と全く同様で、所謂村夫子先生と云ふのが界限の子弟を集めて、別に校舎と云ふのがあってもなく、唯自宅に於てする計りで、其子弟は概ねこれに通學するものだが、中には其家に入込んだものもある、さて其教ゆるものが如何ちやと云ふに先づ諺文と稱する朝鮮假名、夫れから千字文、四書、五經と云ふ風で、且つ何れも纔かに筆跡と音讀を授くる計りである、ソレテ子弟共は例の薄暗い、いとも窮屈な矮屋の中に多人數が、膝を交へて朝

から曉まで一種面白い音調で以て、無意味に音讀を遣つて居るが、何しろまだ腦力の至つて微弱な子弟に向つて、其腦力に堪へないのも構はず、一生懸命これを注入するの結果、大いに智腦の發達を鈍らすとは無論であるが、吾人の見る所では、腦力の發達を鈍らすものは是ればかりでなく、尙ほ其れ以外に彼等の戴冠するのが、大いに關係すると疑ふのである、开は韓國の風、上下貴賤の別なく一般常に衣冠を正し、努めて外貞を装ふと甚しく、随て上は大官から下は馬丁轎夫の輩までが、皆頭に黒冠を戴き、身に白衣の韓服を威儀正しく纏ふとである、單にコト云ふたならば、別段風教には寧ろ利益ありとも、弊害の點は寸毫もないやうであるが頭に此の黒冠を戴くには、先づ頭髮を緊しく結束し、夫れからその髪や額際髪の毛が亂れぬやうに、馬の毛で造つた編物で以て、堅く其痕を印するまでに頭部を締めつけ、高貴の人ならば、其



上に官帽と稱する美麗な帽を被り、普通の人はこの官帽を被らず、直ちに黒冠を戴くのである、これが爲めに腦の發達を妨ぐることゝ云つたら、又た甚しいものであらう、されば此等無智蒙昧の韓人に對して、これに文明の智識を注入せんとするには、教育の方針を全然其根本から改正するとも無論必要には相違ないが、併せて此黒冠を戴くことを禁止し、以て緊縮せる腦をして、自由に發達せしむることをせねば、唯一方注入の側にはばかり、幾ら力癩を入れたとて十分の效果を見ることは覺束なからうと思はるゝ。

近頃韓人の中にも、一新會とか或は進歩會とか、種々な團體が出来て、切りに斷髮を厲行して居るやうである、是は元々腦の發達を健全ならせう杯と云ふ考からでも何んでもない、言はゞ無意味の斷髮なれど、前さには態々斷髮令を布いてまで、之れを

實行させうとしても中々斷髮せぬものが、今は自から進んで之を斷行せんとするに至つたのは、韓人の爲に智腦開發の曙光を見て、聊か心を強うするに足る譯であるのだ

### 教育と早婚

韓國に於いて教育の發達を阻碍するものが一に彼等の常にその腦を緊縮するにあることは、前已にこれを述べたが、尙ほ教育ばかりでなく、總ての風教にまで大いに毒害を流すものが早婚の弊にあることを認むるのである、但し韓人の中には年齢已に壯丁を過ぎて、猶ほ妻を迎へぬものもないではないが、夫れは甚だ稀で、普通男子は十二三歳にして、早く妻を迎ふるのだ、夫れに最も妙に感ずるのが、婦の年齢が常に夫よりも五つ六つ、多きは十以上も超越するの一事である、元來韓人の斯くも早婚するのは、何故ぞと言ふに、我邦では男子は一見、その有妻と無妻とを區別することは出来



ない、唯女子だけが頭髪を丸鬘に結ぶとか、或は土地に依りては齒を染める杯で、  
 かに之れを識別することが出来る位であるが、韓國は全く之れと反對で、女子は一見  
 有夫と否とを知ることが出来ないでも、男子の有妻者は總て結髪し且つ一定の冠を戴  
 き、無妻者は兒童と同様に、何時までも辮髪し及び冠を戴かぬので、容易に有妻と無  
 妻とが識別せらるゝ計りか、無妻者に對しては、我邦にて恰も公民權を剝奪せられた  
 るものかの如く、他人より非常に蔑視せらるゝの風なるを以て、父兄は子に對  
 し、成る可く早く結婚せしめ、以てこの蔑視せらるゝことを免がれしめんと努むるの結  
 果、斯く早婚せしむるものであつて、其夫たる兒童の餘りに年少なるが爲め、婦たる  
 ものは畢竟其保護者たるか、或は舅姑を助けて薪炊の勞に堪ゆるものならざるを得な  
 い譯で、是れ婦の年齒が常に遙に夫に超越する所以であるのだ、而かも夫と婦との年

齒に、著しく懸隔あるが爲めに、種々の弊害があると言ふのは先づザツト斯様であ  
 る、春情の發動期に前後遅速の差違あるのは自然已むを得ぬとであるが、それが爲  
 め動もすれば、婦徳として非難するの點あるばかりか、男子も亦た醜聲殆んど聞くに  
 堪へぬことばかり多くて、家庭の圓滿を缺くことは勿論、延いてその風教に害あると  
 と言つたら、又甚しいものだ、韓國の風一般に女子をして、内房と稱する一室に閉  
 居せしめ、如何なる親懇のものでも、この内房に出入させぬ、全で拘禁的の取扱ひを  
 爲すに至つたものも其原因は婦徳の腐敗を豫防するが爲めからではなからうか、然る  
 に夫れに就て最も其意外千萬に驚くのは、彼等女子が夫の拘禁的扱ひを受けつゝも、  
 反つてこれを僥倖の如く心得益々不徳の行爲を働くのである、而して韓國一般の風俗  
 が、斯くまでも腐敗するに至つた遠因はと言へば、皆早婚の弊からであらうと思はる



抑も其國をして、醇良なる風俗たらしめんには、完全なる教育の普及を圖ることの必要なのは勿論、先づその民をして健全なる國民ならしめざるべからずで、而して健全なる國民は、常に圓滿なる家庭の内より出づるものなることを知らば、韓國に於ては先づ此の早婚の弊を除き以て圓滿なる家庭を作ることが、教育法の改良と共に、復た必要なのであらう。

### 韓人の婚禮

冠婚葬祭は人事の大禮であつて、何處でも随分面倒なもので、殊に土地々々に依りて多少は風習を異にするのであるから韓國の風習が我邦と違へばとて、別に不思議とするには足らぬが、夫れにしても韓國に於ての婚禮の風習が、韓人の氣風其儘を表章し

て如何にも閑氣に出来て居るのが面白  
 婚姻せやうとするには、先づ媒灼人と云ふのがあつて、夫れが相方の血統素性から、格式釣合までをスツク見計らひ夫れから男女の見合ひをも濟ませ、是れならばと云ふ所で、先方の婦の父兄に向つて、相談にかゝる所までは、我邦と大同小異、別に異りはないのであるが、愈々黄道吉日を撰んで、其式を擧げうと云ふには、先づ媒灼人を以て、先方へ其旨を通じ、且つ結納を送るのは勿論、其當日になると、男は所謂一生一代とも云ふべき盛装を爲し（大官の服装に模して身大官に擬するを例とす）且つ多くの隨伴を従へ、自分は馬に跨り、以て婦家の附近まで出掛け、此處で一軒の家屋を借りて之れに落付き、媒灼人をしてツツト其旨を婦家に通せしむるのだ、斯くすれば、婦家ではサー何時でもと云ふ工合に十分の用意を調へソコで使者を以て「茅屋なれど何卒一たび、駕を枉



「せ給へ」と言せるさうすれば、男の方では「我は高位高官の身柄なればソシナ所に狂駕とは罷成らぬ」と云ふ按排式で鷹揚に之れを謝絶る、斯くの如き狂言を演ずると、再三の後ち、一方からは是非にと云ふので、然らば一度狂駕で遣はすと云ふ調子で、始めて婦の屋方に乗ら込むのである、斯くて婦の屋方では、山海の珍味で以て款待すと、数日の後、男は婦を盗み去ると言ふ風で、女をば轎に載せ、自分は矢張り馬に跨り、親族の人々に送られて、其家を出立するのであるが、ソシテ家に還れば、更に披露として親族は勿論、故舊の人々を招きて、宴を張ること数日に亘り、甚しいのは閑宴一ヶ月以上も要ると云ふとである、是れは左程に多数の客を招するのではない、結局その家屋が狹隘で、一時に多数の客を容るゝことが出来ないからであるのだ例へば來客の總数が、假りに百五十人としても一日に十人宛で十五日間、五人宛で三

十日間と云ふ風などは、何んど閑氣なものならずや。

### 韓人と其服装

頭に黒き冠を戴き、身に白き服を纏ひ、ソシテ或は赤く或は碧き上衣を着けた、童子の二三も拉れて、楊柳影濃かなる江村の邊りを、いとも悠々徜徉する所などは、實に一幅の文人畫の儘で、如何にも風流に見ゆれど、その服装が、實用に於て如何に不適當であつて、天性遊惰の韓人を驅つて、勤勉なる國民と化せしむるには、是非其の服装の改良が、大いに必要だと思ふから、序に氣附いた儘を左に述べて見やう。

由來韓人の性一般遊惰に流れ、絶へて勤勉勞苦に服することをせぬは、主として例の官吏の暴戾、その民を虐るの結果、遂に此民をして自然に、アララン主義に甘んずるに至らしめたるものには相違ないが、尙ほ一方ではその服装が、餘程遊惰に導くべく



出来て居るのである、先づ彼等がろの頭に戴く冠が、一方優美と云ふ側から言へば如何にも優美なには相違ないが、夫れの總てが糊で以て粘り付けた許りで、其の破れ易い事と云つたら無類だ、夫れに此冠は家の内外を問はず常にこれを戴き、且つ努めて衣冠を正すの風なるを以て、自然に手足の自由を束縛し、ろの動作を鈍らすとは非常だ、是れ韓人の總てが、肩を使役せず又は手に物を提げず、些細の物まで悉く脊負う所以である、又衣服の白色にして汚染易きは、一方に女子をして、殆んど洗濯の煩に堪へざらしむる許りか、女子年間の業務は、これが爲めに其大半を費やし、隨て他の業務に服するの餘暇なからしむのみならず、男子も兎角に、これを汚染まいとするのど、其袴が餘りに大に失して、行動何んもなく不活潑なるとは、共に業務の拂取りを鈍らすことを免がれぬのだ、殊に甚しいのは、彼等が雨具として唯一に頼めるも

のが、油紙で製造つた盆大の傘で、是れは單に頭部にばかり被るものだ、开は例の冠が、纒に糊で以て張つたばかりのもので、一度雨に逢ふときは、忽ち滅茶々となつて、再び使用に堪ぬので、只之れを濡さぬ爲めに出来たものだ、其他には一として雨具の用意とてはない、夫れ故に雨は韓人の爲めには大敵で、韓人夫れ自身にも、一般に雨は天の我等に與へられた、安息日かの如く心得、降雨の時は三日でも四日も只家にばかり閉籠つて、全で外出せぬのである、アレで韓國が雨量の少ない所だからまだ可いが、若しも雨量の多い所でもあらうものなら、一人も残らず早く餓死したのであらう、何にしても韓人位閉氣に出来た國民と言つたら、恐らくは世界中殆んど無類と言つて善からう。

衣食足つて禮節を知るてふ筆鋒から云ふならば、また衣食すらトントお話にならぬ、



此國民に向つて禮節などの事を責むるは、抑も無理なる注文にして、之れを責むるも  
 のころ、反つて野暮の骨頂、夫れよりも斯る國民に向つては、先づ遊惰なる彼等の惡  
 習慣を破り、以て勤勉能く勞苦に堪ゆるの習慣たらしむるに努めねばならぬ、而し  
 て斯くするには、一般がソーでなくとも、せめては勞働に服するもの丈けでも、先づ  
 實用に不便なる此衣服から、これを改良するのが急務だらうと思はるゝ。

### 韓國の獨立

韓國に於ける上下が、總て無能と無智の寄合で、剩りに官吏の暴戾實に甚しく、且つ  
 人民の貧弱亦た此上なきにも拘はらず、韓國夫れ自身は、如何にも結構な國の如くに  
 心得、世界の列國と肩を並べて、その獨立を何處までも維持せやうとする、其意氣丈  
 は、稍稱すべきでも、如何にも頼りない話であるが、古來義俠を以て國を建たが上に

韓國とは隣邦の誼みで以て、何處までも此國を扶けて、その獨立を世界列強に確認さ  
 せうとする、我が日本帝國のあればこそ、韓國の國家も國民も、共に大いに心を強ふ  
 するに足る譯で、韓國は其恩誼に對して、何處までも之れを謝せねばならぬのだに、  
 而るに韓人の性原來無智の癖に、頗る猜疑心深く、動もすれば愚民を煽動し、我れに  
 對して排斥せんとするの形跡あるのは、如何にも忌々しい次第ではあるが、是れが露  
 國の如きの遣り方ならばソナ義理知らずには、恩誼も何もあつたものでない。直に  
 はね付けて仕舞つて是れを機會に一仕事でも仕様と言ふのだが、夫れにも頓着せずド  
 にかして、其國を開明に導き、其民をして速く仁政の下に、太平を謳歌させうとする  
 其親切な心根は、世界列強の共に承認する所で、併しながらソー仕やうとするには蓋  
 し並大抵の骨折りではないのである、それに就いて茲に我が日本人の一般が、大いに



注意せねばならぬと思ふのは、韓國の獨立保全を以て、是れは當さに日本政府の爲すべき事ぢや杯と云ふやうな、他人根性を持たず、人民も亦た能く其心を体し、自ら進んで彼國に入り、親しく彼の國民と日夕相往來し以て此民をして開明に導くことに努め、所謂上下能く其心を一にし、内外相呼應してせねばならぬ、若し一方で其方針を以て進めばとて、他の一方で之れを破壊するかの如く、政府の施設と國民との意思が相表裏するやうでは、到底十分の好果を見ることは覺束なからう、茲は宜しく上下一体共に其心を一にし、以て其事に任ずるの最も肝要なとは、固より言ふまでもないが、第一は韓國夫れ自身の上下が、先づ其氣にならなければならぬ、若しソでなく其政府内には種々の異分子相混じて、互に政權の爭奪を試み、且は其人民中には、無類の凶徒愚民を煽動して、只理由もなく排日とか何とか、たわけた事ばかり演ずるや

うでは、今後韓國の獨立も實に思ひ遣られたものだ。

東洋の韓人志士は、皆韓人の利益を以て奮闘する

## 裏面の韓國

(終)



99  
267

海外起業の指針

吉村君著  
大次郎君著  
增訂第四版

渡米盛業の手引

一名米國上陸後の職業案内

本書は最近數年間米國に在る在留五萬同胞の黒衣宰相と唄はれたる吉村先生が米國上陸後の我が出稼者に尤も適當なる職業、農業、商業及び各種の労働等を綱を分ちて説明せられたるものにして著者在米中の設立に係る同胞共濟機關等の記事は渡米者の尤も意を強くするに足るものなり叙事言文一致にして分り易く渡米のしるべと相待て渡米者必讀の好書とす  
今回第四版發行に際し在米同志の最近通信に係る有望なる新事業の實況を増加し愈々本書の光彩を添ふ

發行元

大阪東區瓦町五丁目  
(電話東千〇四十二番)

岡島書店

發賣所 植田書房

洋裝美本全壹冊  
紙數二百餘頁  
實價金貳拾五錢  
郵送費四錢  
郵券代用壹割増

明治三十八年四月十五日印刷  
明治三十八年四月廿日發行

(定價金貳拾五錢)

複製製  
不拔萃  
不許

著述者	在	沖	田	錦	城
發行兼印刷者		植	田	熊	太
發賣所		岡	島	書	店
發賣所		輝	文	館	
發賣所		前	川	文	榮
發賣所		上	山	松	藏
發賣所		下	關	市	西
		南	部	町	

所造製版活上井 町之中谷邊區南市阪大 所刷印



最新刊廣告!!!

百村大次郎君

獨立米遊學案内

新形美本全一冊  
定價金貳拾五錢  
郵送費金四錢

本書は専ら米國に在る日本人青年の自給修學の便法を説明せられたるものなり、苟くも父母の力に依らず、他人の庇護を頼まず、獨立獨歩して、克く日新の學を萬里の外に修め、以て身を立て國に盡さんと欲するの士は、争て之を一讀せざる可らず

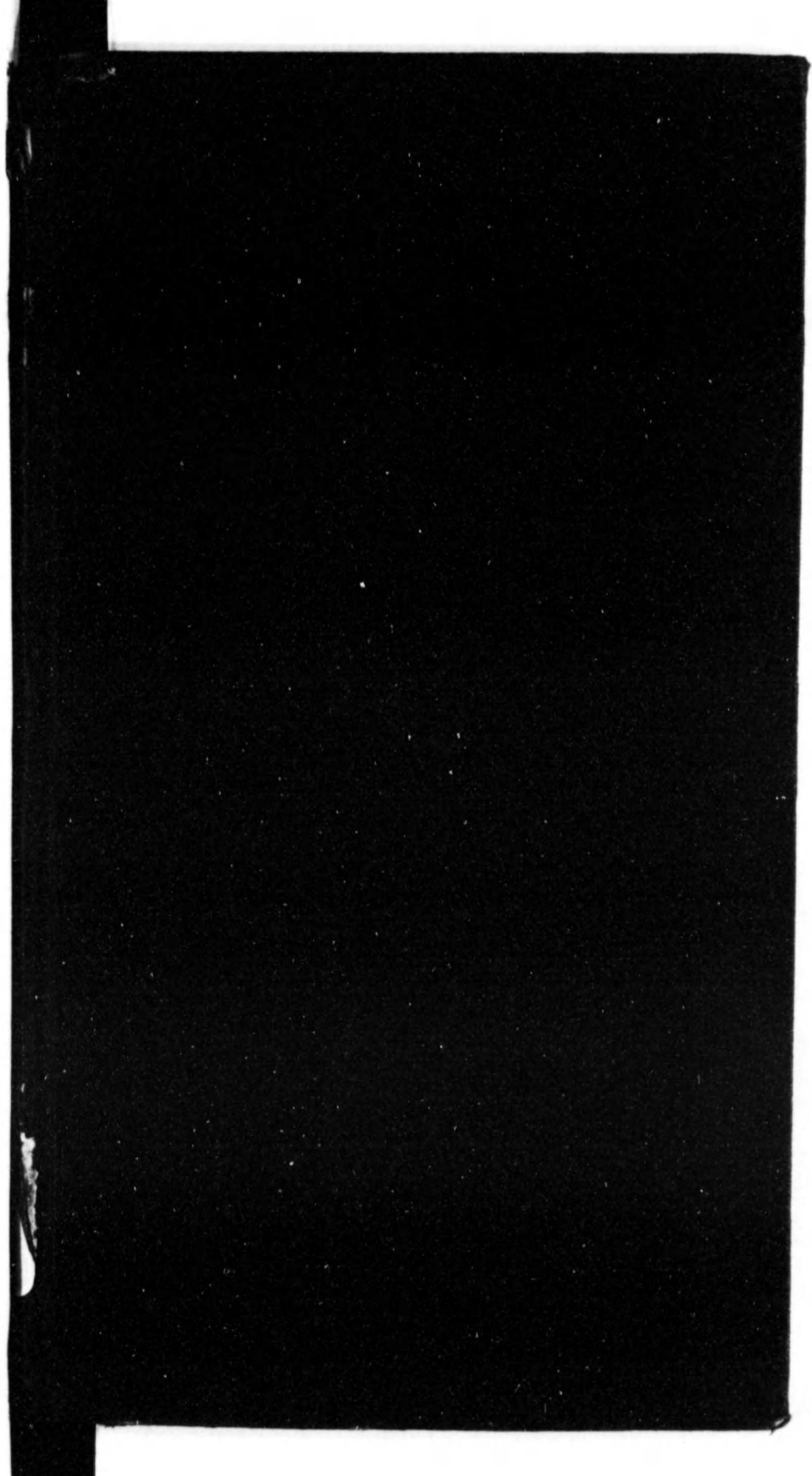
發行元 大阪市東區瓦町五丁目 岡島書店 ●發賣所 植田書房

主 渡航準備、服裝携帶品 ▲二三等客渡米日記 ▲著者の紹介したる學生のスクー  
ルポリードなるの實地經歷通信談 ▲米國風俗の心得 ▲移民官との最近應答談  
要 (英和兩文對照) ▲各大學の所在地、及び校風、學科程度 ▲最新上陸規則等  
事



97  
267







97

267

026473-000-3

97-267

裏面の韓国

沖田 錦城/著

M38

ADD-0129





